2006年度
消費者金融の利用に関する調査
報告書

２００７年　１０月１５日（改訂）

堂下　浩（東京情報大学・准教授）

内田　治（東京情報大学・准教授）

1. 利用者調査の目的と調査フレーム

1－1. 調査の目的

様々な場で消費者金融利用者の実態が論議されてきたが、多くの調査では債務整理に陥った利用者など特定利用者に焦点を当てており、現在消費者金融を利用している、真の利用者像が見えていない。そこで、できるだけ多くの利用者のサンプルを集め、統計学に基づく調査を行い、消費者金融利用者の実態を浮き彫りにするのが本調査の目的である。

1－2. 調査対象者

実施機関となるインターネット調査会社に登録している20歳以上のモニターを対象とした。

1－3. 調査方法

インターネットのアンケート調査。対象者にメールで協力依頼を行い、アンケートの回答をインターネットで受け付ける手法。回答者数の上限を設けず、期間中は全員が回答可能とした。

2006年2月にパイロット調査を実施。その結果を踏まえて調査項目を設計した。

1－4. 調査期間

2006年5月15日（月）～ 5 月24日（水）

1－5. 調査項目

主として以下の内容の設問を設定

① フェースシート （個人属性、世帯の状況、経済状況）

② 心理特性

③ 各種ローンの利用状況

④ （消費者金融の現在利用者）借入の実態・意識

⑤ （消費者金融の過去利用経験者）借入時の状況・意識

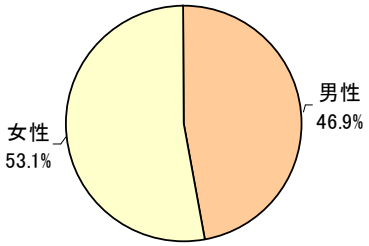
⑥ 消費者金融に関する知識

2. 回答者のプロフィール

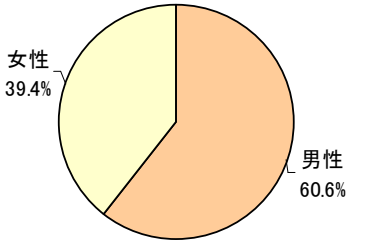
（1） 性別

消費者金融現在利用者、過去利用者は、全体に比べて男性の比率が高い。

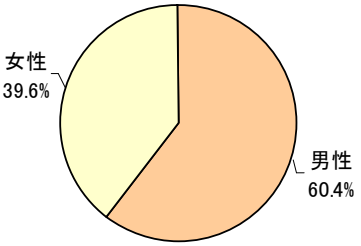
【 全体(n=142264) 】



【 消費者金融 現在利用者(n=5299) 】



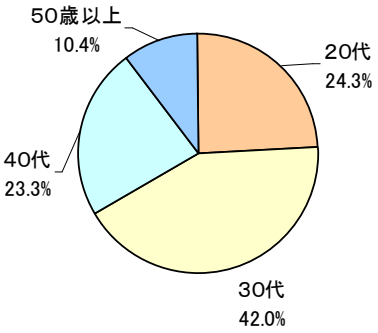
【 消費者金融 過去利用者(n=7802) 】



（2） 年齢階層

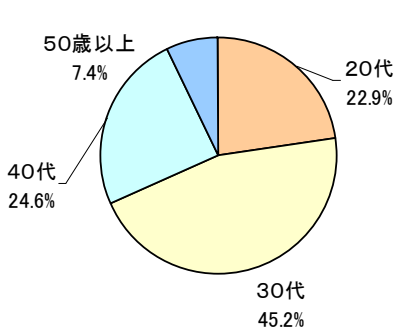
年齢階層の構成比には大きな差異は見られないが、消費者金融の現在利用者、過去利用者は、30代の比率がやや高く、50歳以上の比率がやや低いという特徴が見られる。

【 全体(n=142264) 】



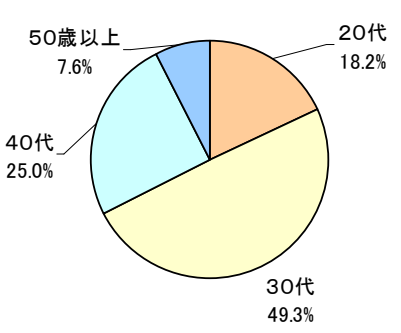
平均値：36.7歳

【 消費者金融 現在利用者(n=5299) 】



平均値：36.2歳

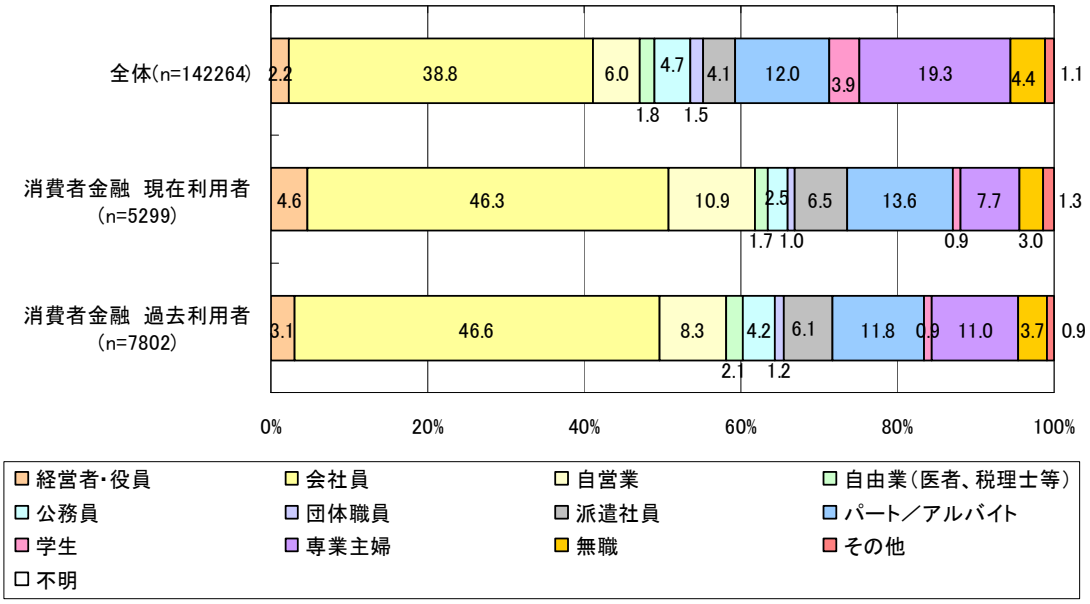
【 消費者金融 過去利用者(n=7802) 】



平均値：36.8歳

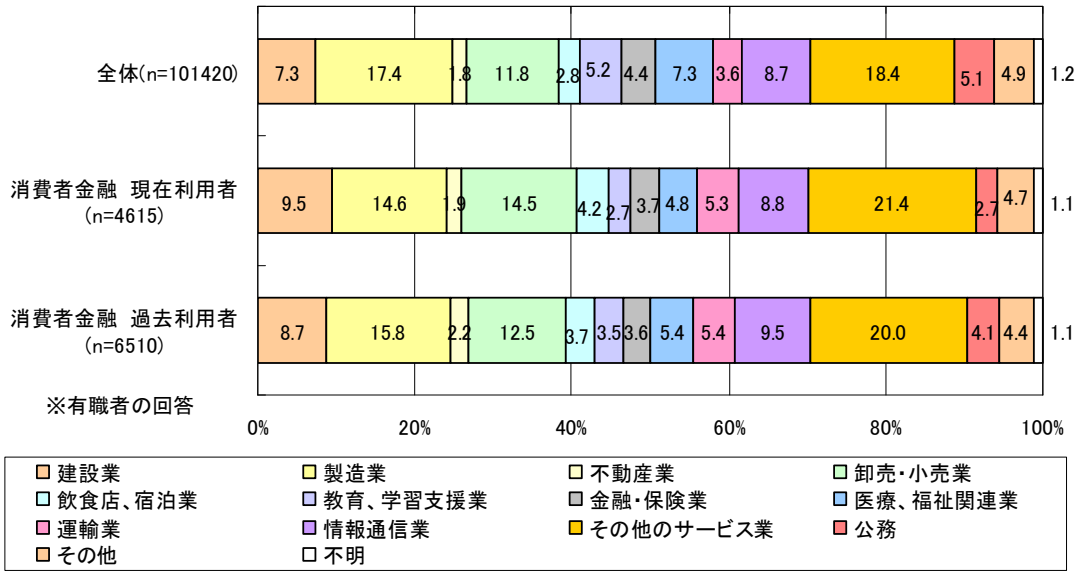
（3） 職業

消費者金融現在利用者、過去利用者では、会社員の比率が全体に比べて高く、専業主婦の比率が低くなっている。



（4） 業種

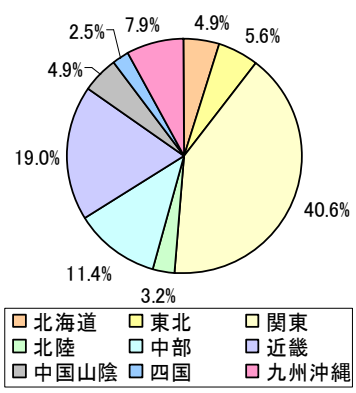
業種の構成比に大きな違いは見られない。



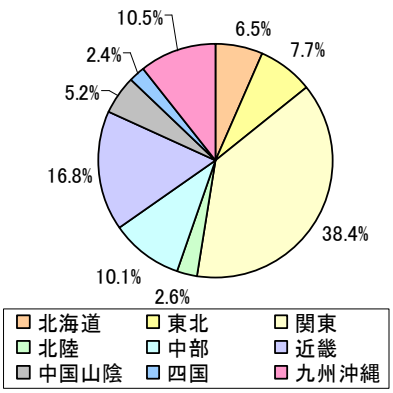
（5） 居住地域

居住地域に関しては顕著な差は見られない。

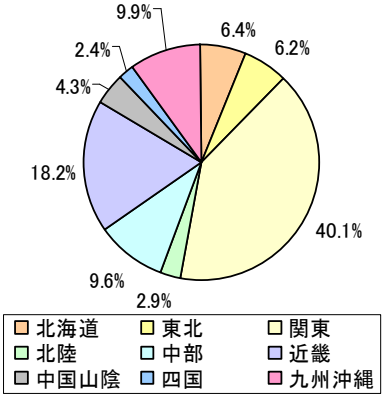
【 全体(n=142264) 】



【 消費者金融　現在利用者(n=5299) 】



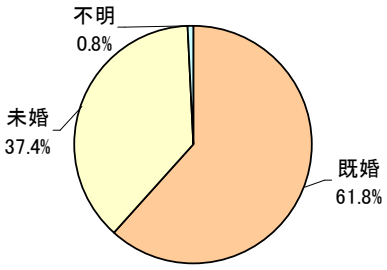
【 消費者金融　過去利用者(n=7802) 】



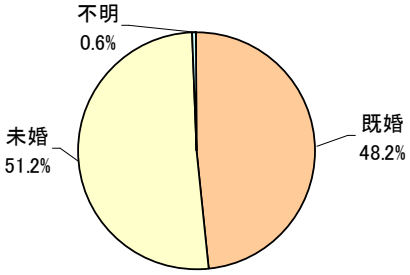
（6） 配偶関係

消費者金融現在利用者、過去利用者は未婚率が高い。

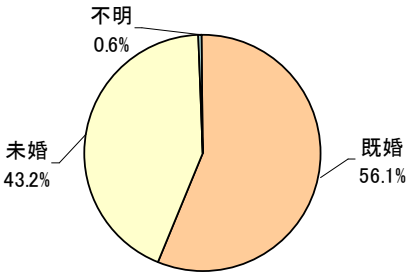
【 全体(n=142264) 】



【 消費者金融　現在利用者(n=5299) 】

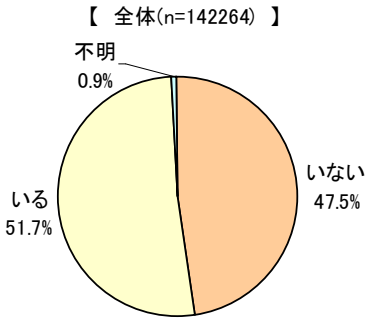


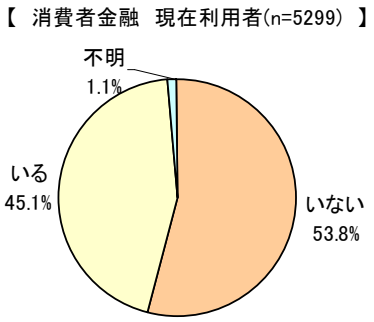
【 消費者金融　過去利用者(n=7802) 】

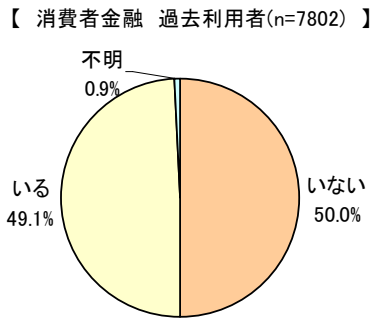


（7） 子供の有無

消費者金融現在利用者は、子供のいない比率がやや高い。







（8） 個人年収

全体に比べて、消費者金融現在利用者・過去利用者の平均個人年収がやや高い。中央値では全体と現在利用者とで差はない。

	n	平均値（単位：万円）	中央値（単位：万円）
全体	99,069	394	350
消費者金融　現在利用者	4,567	425	350
消費者金融　過去利用者	6,473	425	400

※サンプルを有職者ベース（パート・アルバイトを含む）に限定して集計

（9） 世帯年収

全体に比べて消費者金融現在利用者の平均世帯年収が低い。

	n	平均値（単位：万円）	中央値（単位：万円）
全体	142,264	661	580
消費者金融　現在利用者	5,299	613	500
消費者金融　過去利用者	7,802	655	550

（10） 預貯金額

預貯金額の平均は、全体に比べて消費者金融現在利用者で低い。

	n	平均値（単位：万円）	中央値（単位：万円）
全体	142,264	564	100
消費者金融　現在利用者	5,299	234	0
消費者金融　過去利用者	7,802	410	30

（11） 1ヶ月に自由に使える金額（お小遣い）

1ヶ月に自由に使える金額（小遣い）の平均については、大きな差はみられない。

	n	平均値（単位：千円）	中央値（単位：千円）
全体	142,264	40	30
消費者金融　現在利用者	5,299	43	30
消費者金融　過去利用者	7,802	45	30

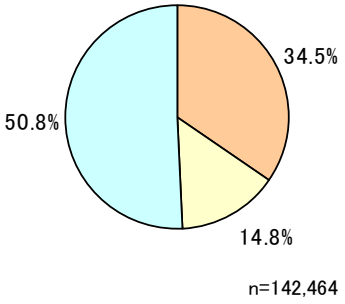
3. 回答者のローン利用状況

（1） ローン利用状況

回答者全体における借入状況は、住宅ローンを含まないローンで見ると、34.5%が何らかのローンを現在利用中、14.8%が過去に利用しており、全体の約半数がローンを利用している。

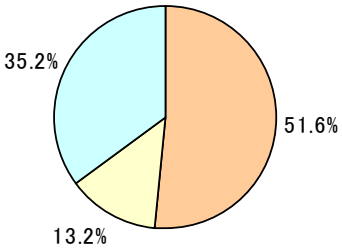
住宅ローンを加味すると、現在利用者が半数を超える。

【借入状況（住宅ローンを含まない）】



n=142,464

【借入状況（住宅ローンを含む）】



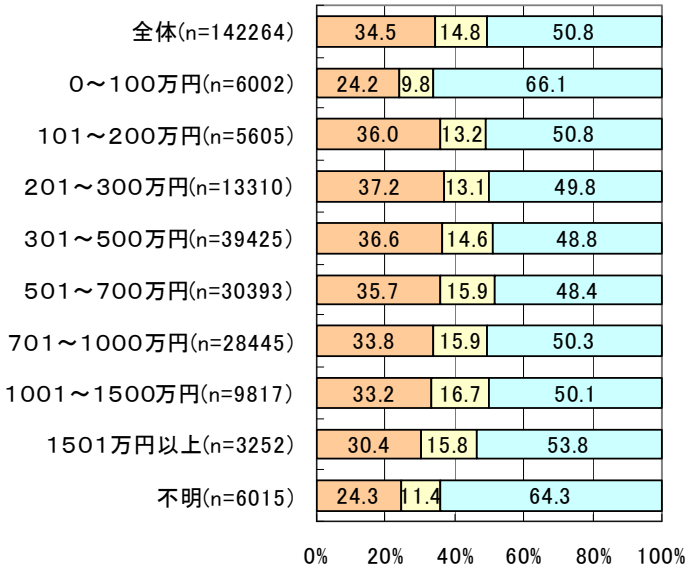
n=142,464

- 現在一つでもローンの借入がある
- （現在はないが）過去に一つでもローンの借入があった
- これまでローンの借入がない

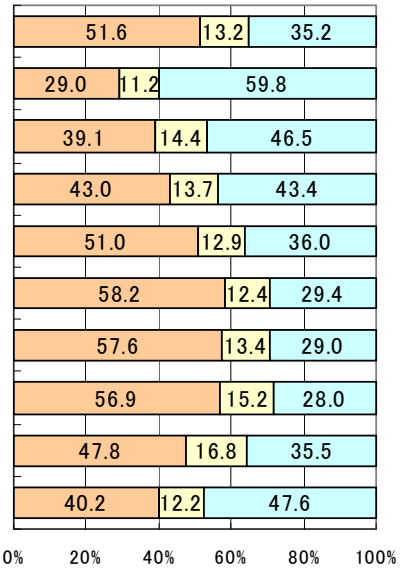
世帯年収別に見ると、住宅ローンを含まない借入状況は、101万円以上1500万円以下の所得層ではほとんど差はない。

住宅ローンを加えると、1500万円の所得層までは年収が多いほどローンの利用率が高い。

【世帯年収別借入状況（住宅ローンを含まない）】



【世帯年収別借入状況（住宅ローンを含む）】



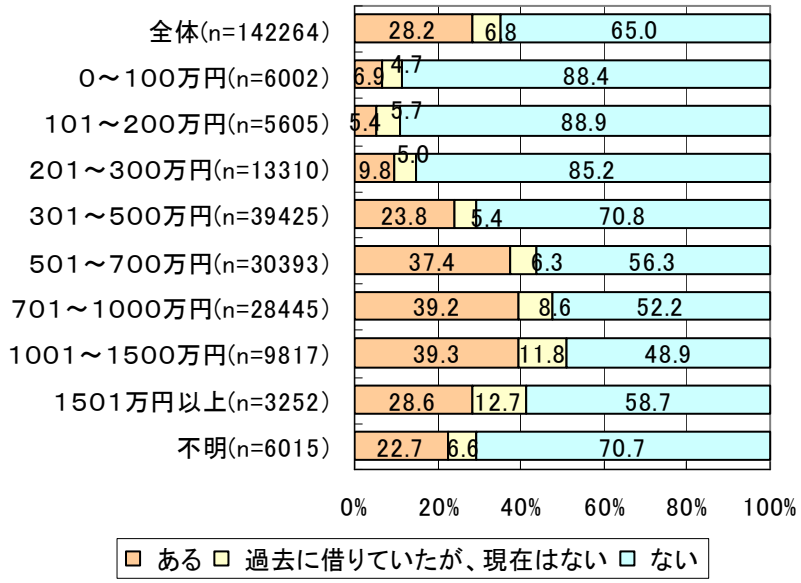
- 現在一つでもローンの借入がある
- （現在はないが）過去に一つでもローンの借入があった
- これまでローンの借入がない

（2） 住宅ローンの借入状況

住宅ローンの利用状況を世帯年収別に見ると、年収が301万円以上の層において20～40%の利用率となっている。

現在利用率は年収1001～1500万円の層においてもっとも高い。

【世帯年収別　住宅ローン借入状況】

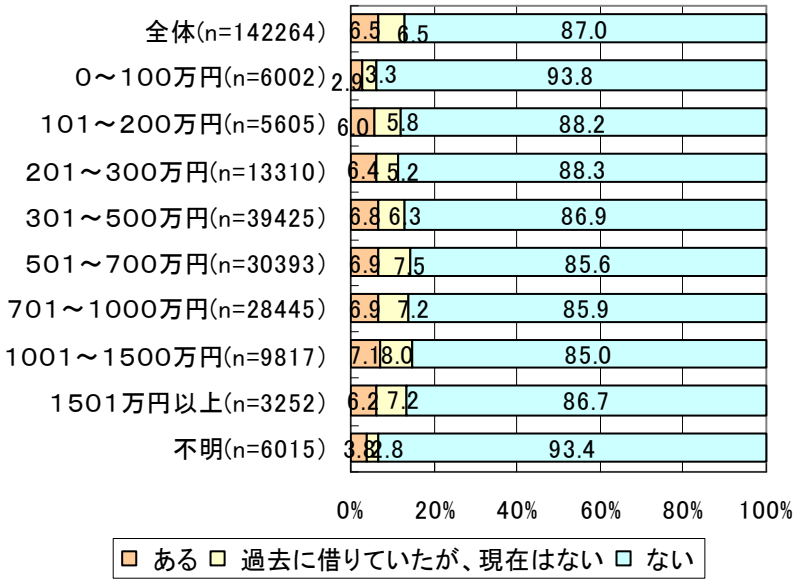


（3） 銀行のカードローンの借入状況

銀行のカードローンの利用は、過去の利用経験まで含めると、年収101万円以上の層では10～15%程度の利用率となっている。

現在利用率が最も高いのは年収1001～1500万円の層である。

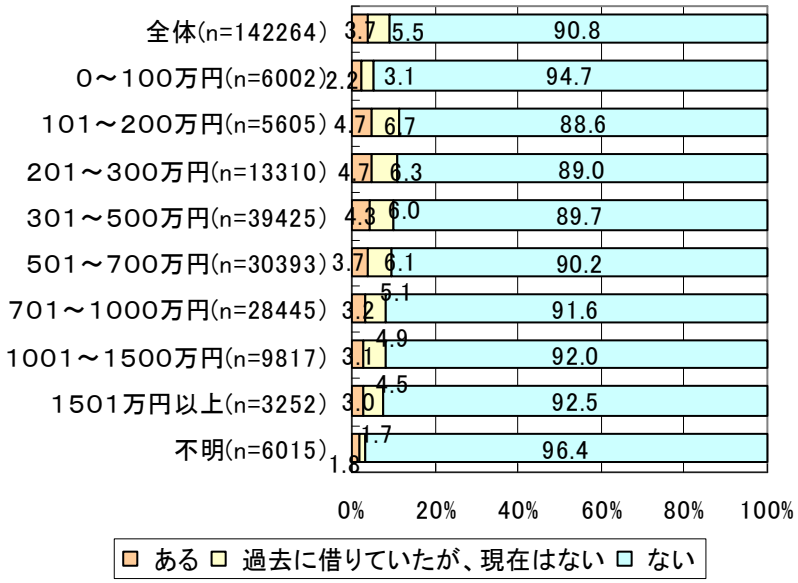
【世帯年収別　銀行のカードローンの借入状況】



（4） 消費者金融の借入状況

消費者金融の利用は、年収101万円以上の層ではいずれも10%程度で大きな差はないものの、101～500万円の層に利用のピークがある。

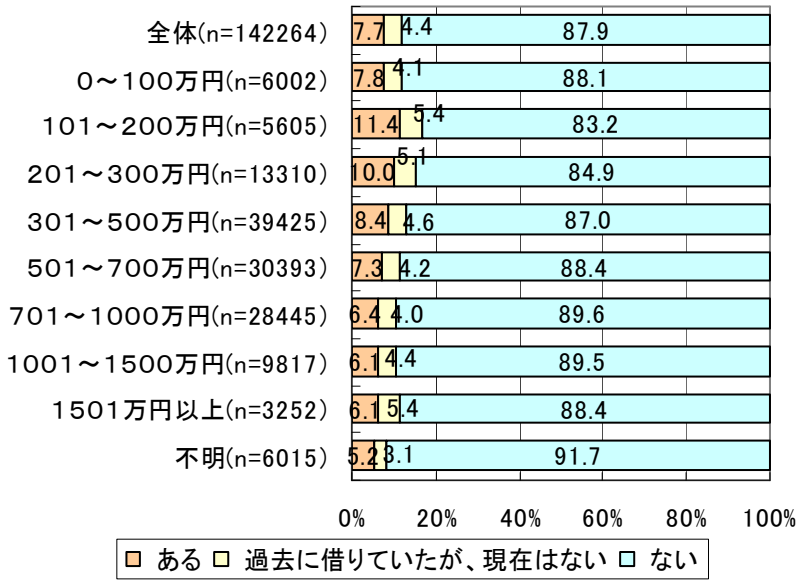
【世帯年収別　消費者金融からの借入状況】



（5） 親族・友人などからの借入状況

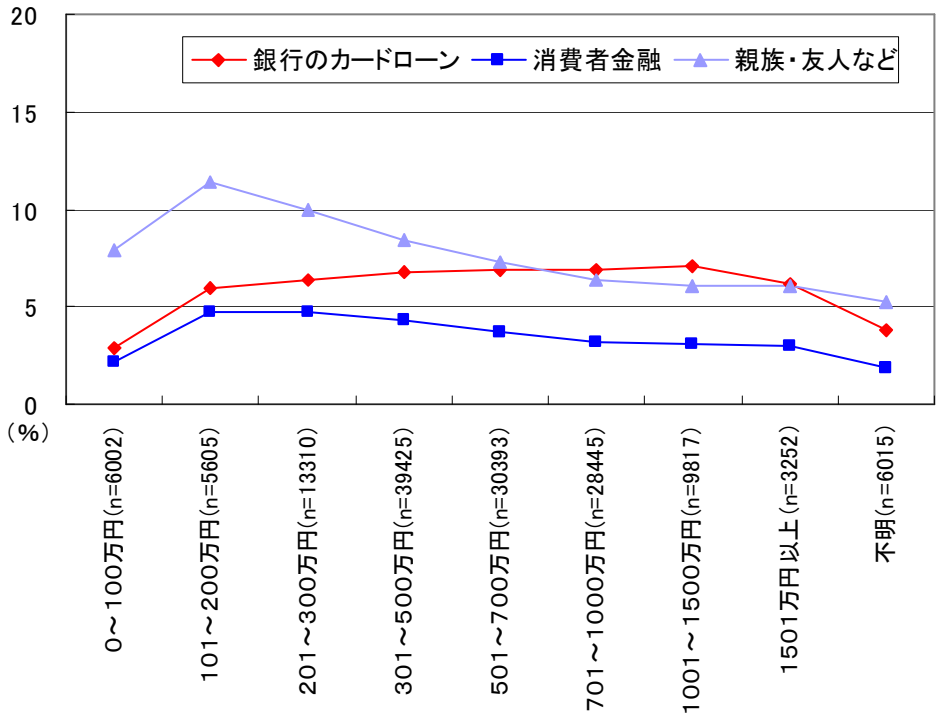
年収が低い世帯ほど親族・友人などから借り入れる率が高い傾向。利用率は年収101～200万円の層がピークとなっている。

【世帯年収別　親族・友人などからの借入状況】



銀行のカードローン、消費者金融会社、親族・友人などからの現在の借入状況を比較すると、年収が101～300万円の世帯において親族・友人などから借り入れている率が高くなっている。

【世帯年収別　現在借入ありの比率（世帯年収別の利用率）】

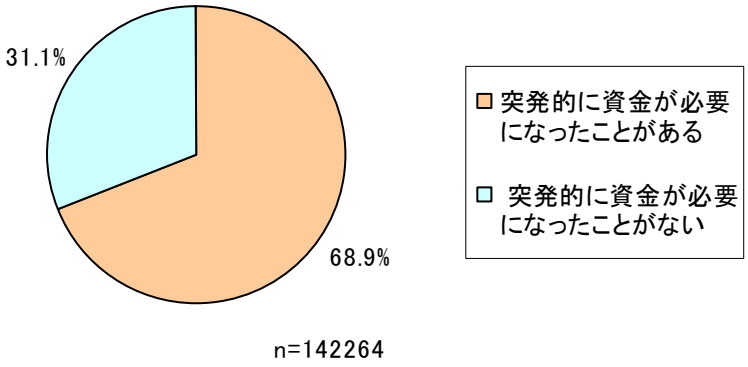


今回のアンケートでは、以下の金融商品・借入の残高と月々の返済額をたずねた。

（1）住宅ローン
（2）住宅ローン以外の目的ローン
（3）銀行のカードローン
（4）クレジット会社のキャッシング・カードローン
（5）消費者金融会社と銀行の共同出資会社からの借入
（6）消費者金融会社の借入
（7）住宅ローン以外の不動産担保ローン
（8）親族や友人などからの借入
（9）勤め先からの借入
（10）その他金融機関からの借入
（11）上記以外のところからの借入

（6） 突発的な資金のニーズ

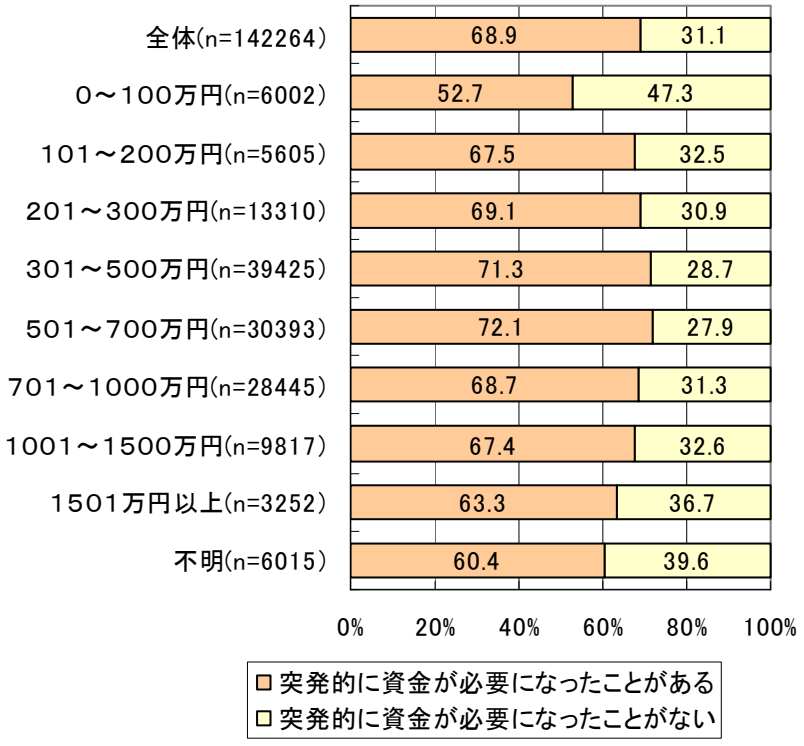
突発的な資金が必要になった経験は全体の約7割に達する。



いずれの年収層においても半数以上の資金ニーズがある。

世帯年収別で見ると、301万円以上700万円以下の世帯を中心として突発的な資金ニーズが高い傾向。

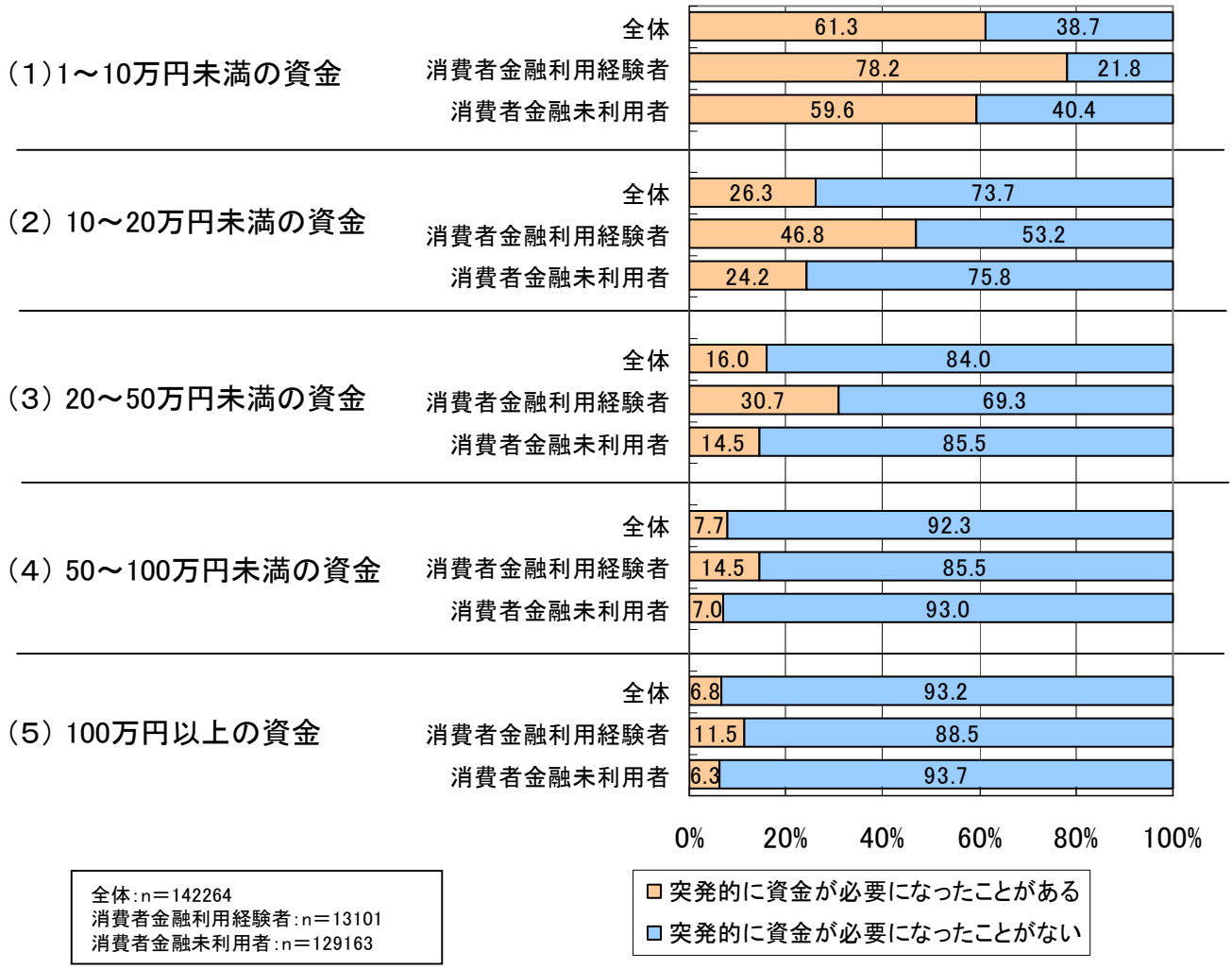
【世帯年収別　突発的資金ニーズ】



必要になった金額別に見ると、低額の資金ほど突発的に必要とされる割合が高い。

いずれの金額においても、消費者金融利用経験者の方が未利用者に比べて資金が必要となった割合が高い。

【金額別　突発的資金ニーズ】

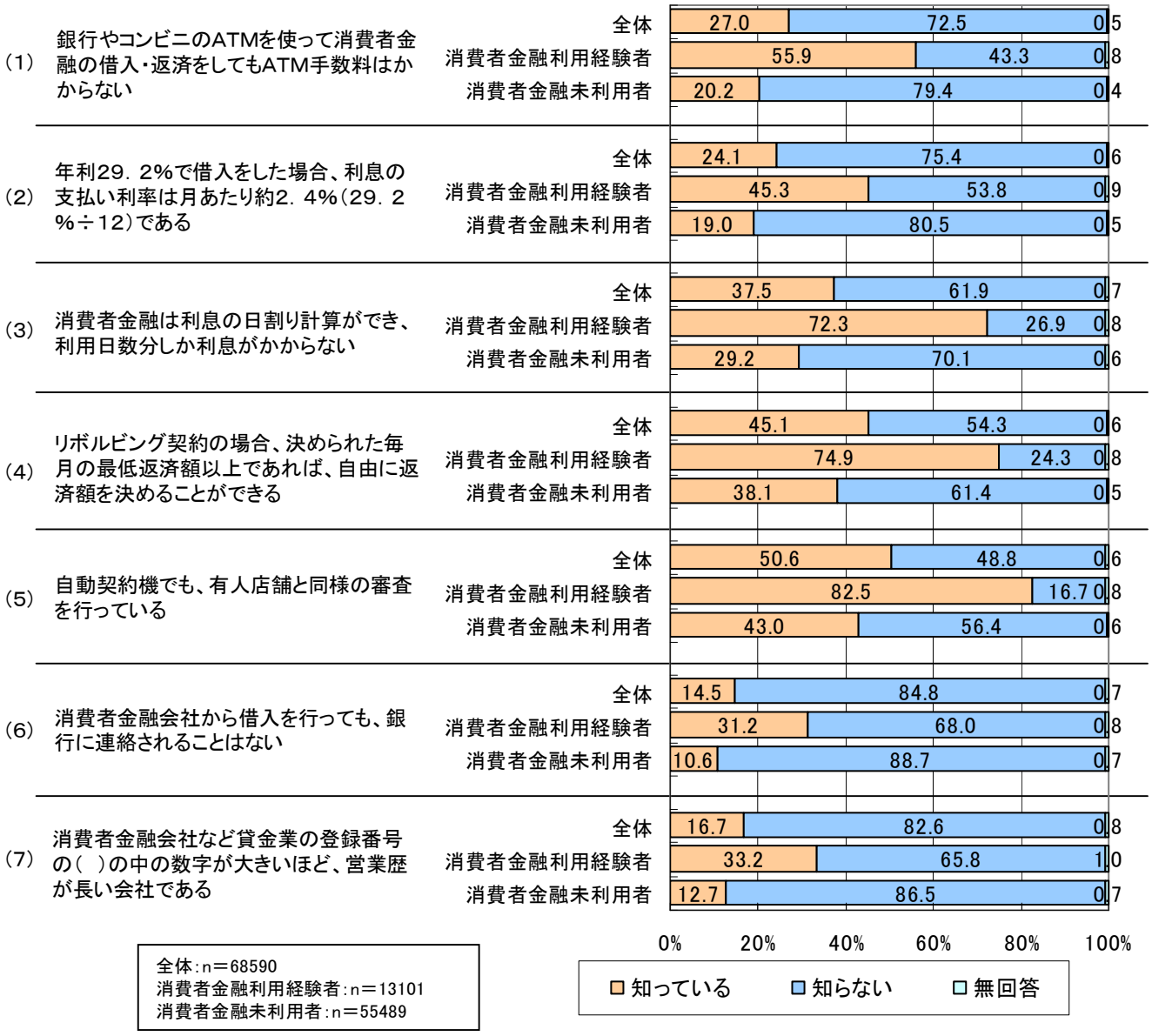


全体：n＝142264
消費者金融利用経験者：n＝13101
消費者金融未利用者：n＝129163

※消費者金融利用経験者＝消費者金融の現在利用者＋過去利用者

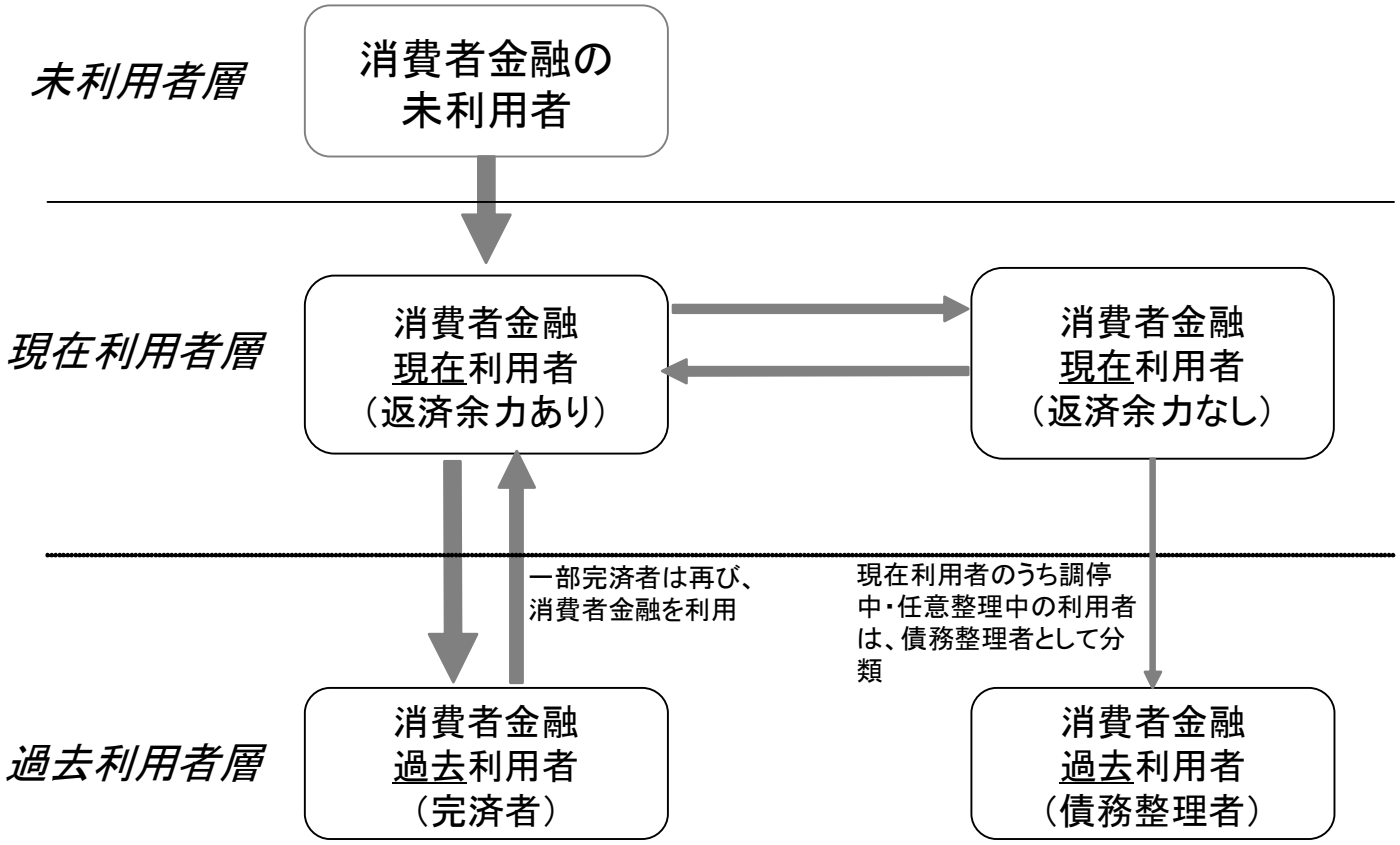
（7） 消費者金融に関する知識

いずれの知識に関しても消費者金融利用者経験者の知っている率が未経験者を大きく上回るが、中でも(3)「消費者金融は利息の日払い計算ができ、利用日数分しか利息がかからない」で43ポイントと大きく差が開いている。



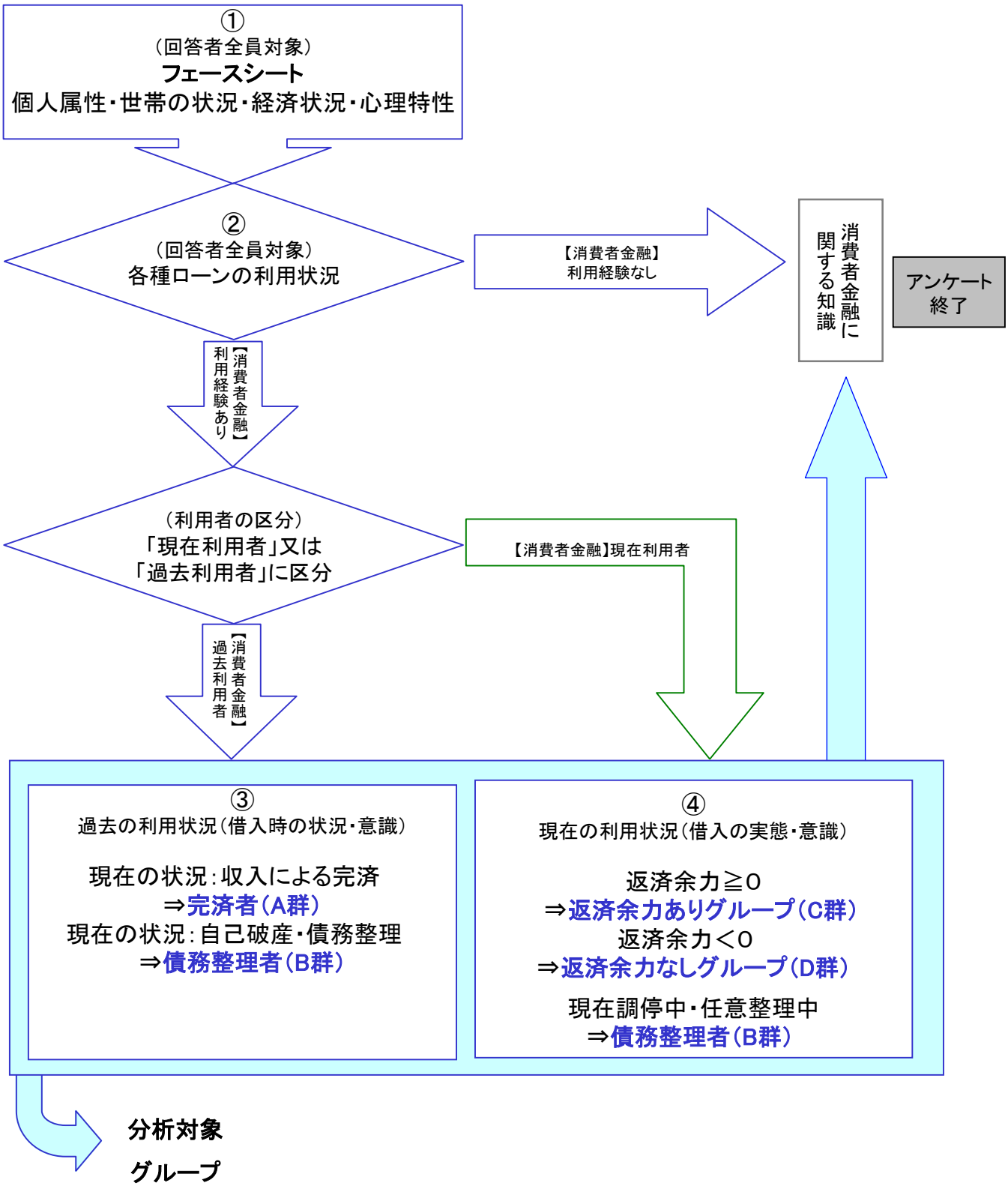
全体:n＝68590
消費者金融利用経験者:n＝13101
消費者金融未利用者:n＝55489

4. 対象者層の分類


未利用者層
消費者金融の
未利用者
現在利用者層
消費者金融
現在利用者
（返済余力あり）
消費者金融
現在利用者
（返済余力なし）
一部完済者は再び、
消費者金融を利用
現在利用者のうち調停
中・任意整理中の利用者
は、債務整理者として分
類
過去利用者層
消費者金融
過去利用者
（完済者）
消費者金融
過去利用者
（債務整理者）

5. 対象者層の分類方法

※対象者層（分析対象となるグループ）の定義は、以下のようなアンケートの回答内容の分岐で行った。



返済余力の定義

月々の返済可能額－月々の返済総額＝返済余力　と定義した。

返済可能額は、実収入と世帯人員から実支出を予測し、この予測値を月収から引いて求めることとした。予測式には総務省「家計調査年報」（平成18年版）のデータを使用している。

なお、消費支出のデータに関しては、以下の2つのケース（定義式）を想定した。

・ケース1：

「 **返済困難に直面しても、利用者は生活費一切を切り詰めない**」と仮定した場合

- 実支出の全項目を用いて算出
- 利用者は返済余力がマイナスになっても、支出を維持すると仮定（支出を抑える行動をとらない）
- 構成比：**返済余力あり71%　返済余力なし29%**　（債務整理者・分類不能を除く）

・ケース2：

「 **返済困難に直面したら、利用者は娯楽費等の一部支出を切り詰める**」と仮定した場合

- 教養娯楽及びその他の消費支出（諸雑費、こづかい、交際費、仕送り金）を除いた上で実支出を算出
- 利用者は返済余力がマイナスになったことにより、支出を切り詰め返済余力を確保しようと行動すると仮定
- 構成比：**返済余力あり87%　返済余力なし13%**　（債務整理者・分類不能を除く）

✓本調査では、ケース1を採用した（市場における返済困難者を広範囲に定義する）。

６．グループ別対象者数

※グループ毎の有効対象者数は、以下のとおり。

<table>
<tr><td>消費者金融
未利用者</td><td colspan="5">129,163人</td></tr>
<tr><td rowspan="2">消費者金融
過去利用者</td><td rowspan="2">7,802人</td><td>完済者（A群）</td><td>－</td><td>債務整理者（B群）</td><td>分類不能・その他</td></tr>
<tr><td>4670人</td><td>－</td><td rowspan="3">1578人
※債務整理者1,310人
調停・任意整理中268人</td><td>1822人</td></tr>
<tr><td rowspan="2">消費者金融
現在利用者</td><td rowspan="2">5,299人</td><td>返済余力あり
グループ（C群）</td><td>返済余力なし
グループ（D群）</td><td>分類不能</td></tr>
<tr><td>3377人</td><td>1399人</td><td>255人</td></tr>
</table>

※過去利用者のうち、消費者金融の取引終了方法が「収入による完済」、「債務整理」以外の方法である回答者については「分類不能・その他」とした。

※現在利用者のうち、グループ区分に必要な回答データに不備（無回答など）がある回答者については「分類不能」とした。

7. 消費者金融利用者の特徴

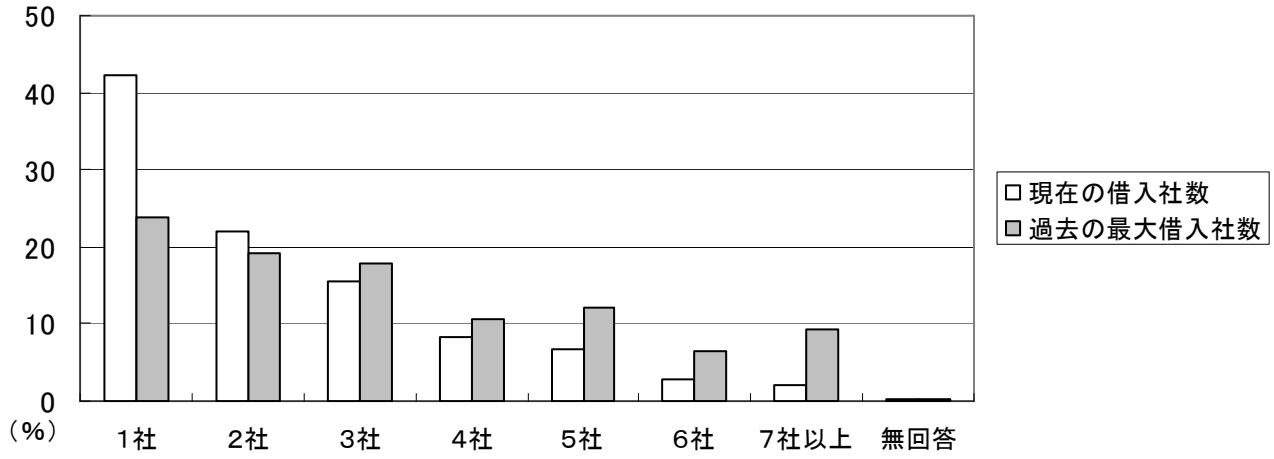
7-1.単純集計およびクロス集計による特徴の抽出

○消費者金融現在利用者（n＝4,525※）

※現在利用者5,299人のうち、調停中・任意整理中、及び分類不能の回答者を除いたサンプル。

・消費者金融からの借入件数

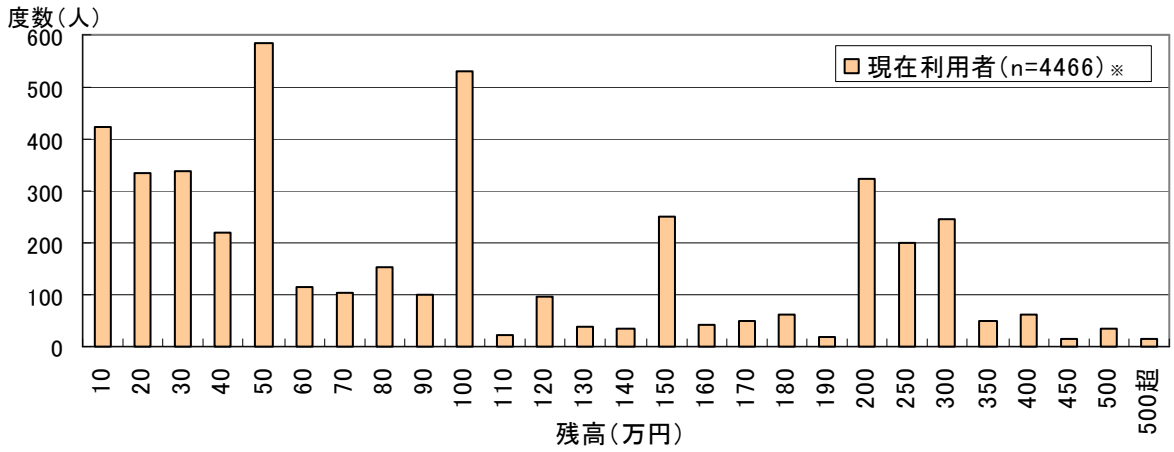
グラフに示される通り、「現在の借入件数」と「過去の最大借入件数」には差異が存在する。



・消費者金融からの借入金額

平均値　111万円、　中央値　80万円

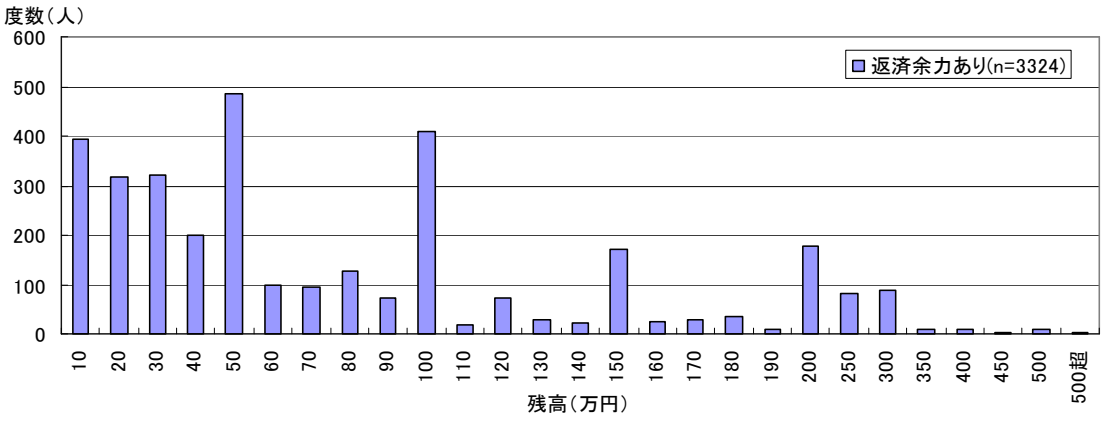
統計学的にみると平均値と中央値が乖離しており平均値のみで一般像を推し量ることは無意味であるといえる。データの分布を考慮した議論がなされるべき。

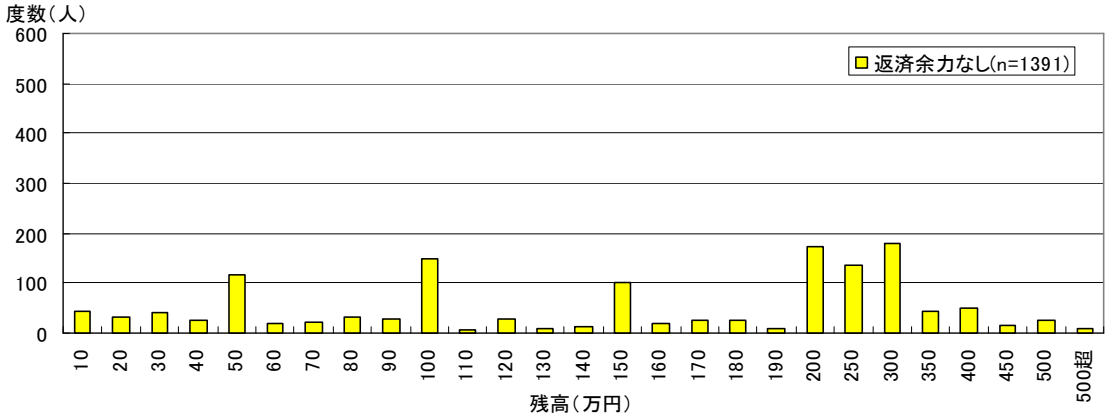


※欠損値のサンプル（59人）を除く

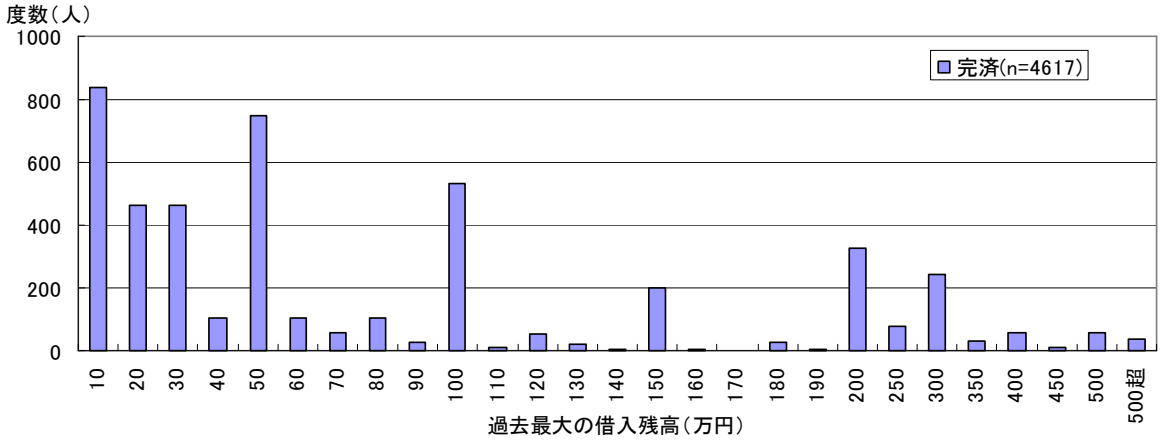
グラフにも示されるように、「返済余力のない利用者」は借入残高10万円台にも存在する。一方、「返済余力のある利用者」は高額な借入残高にも存在する。

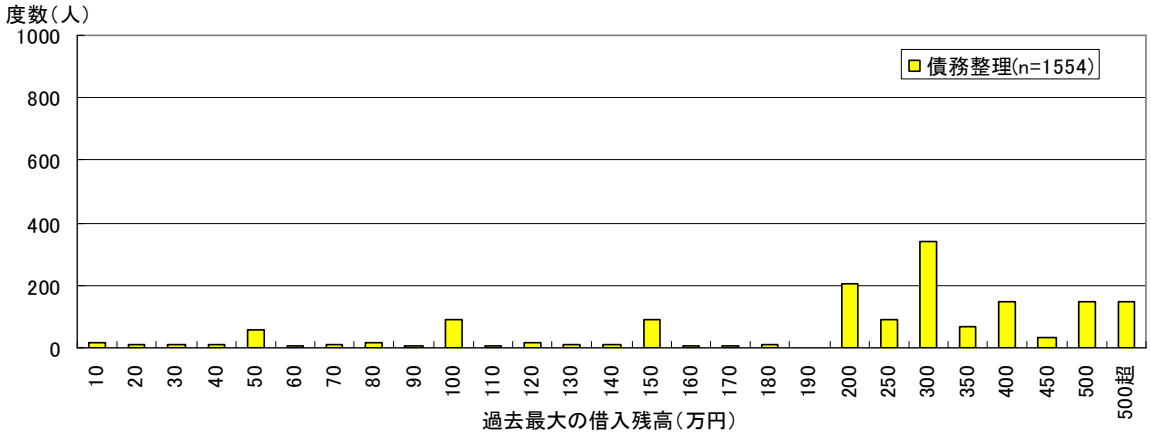
→ 多重債務を予防する手段として総量規制の導入が検討されているが、健全な利用者の資金需要に弊害を与えるだけでなく、低い借入残高にも拘わらず返済困難に陥っている利用者に救済の手を差し伸べることができない可能性がある。





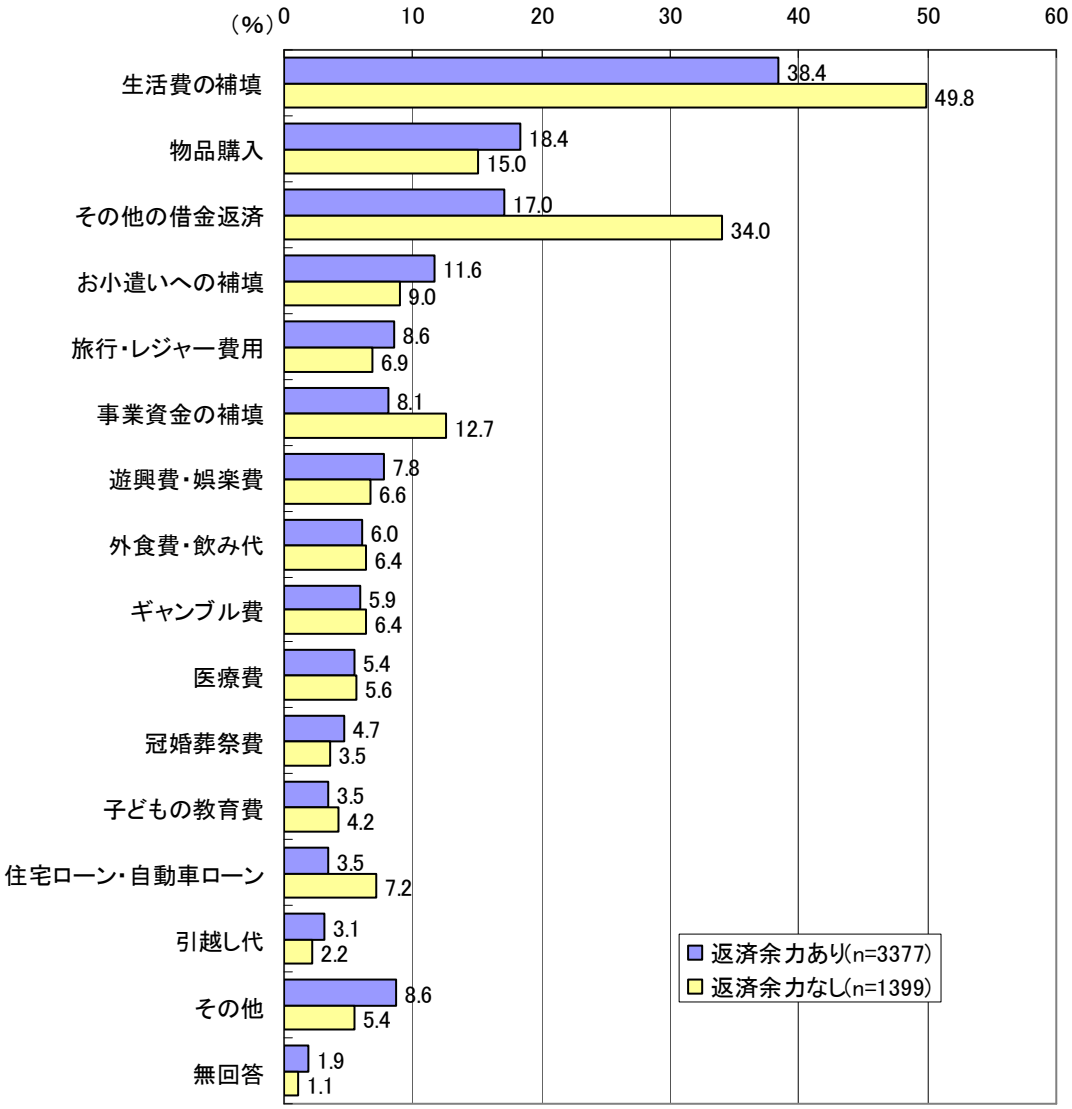
消費者金融からの最大借入残高が100万円以下の少額でも債務整理に陥る場合があることが分かる。





・消費者金融の主な利用目的

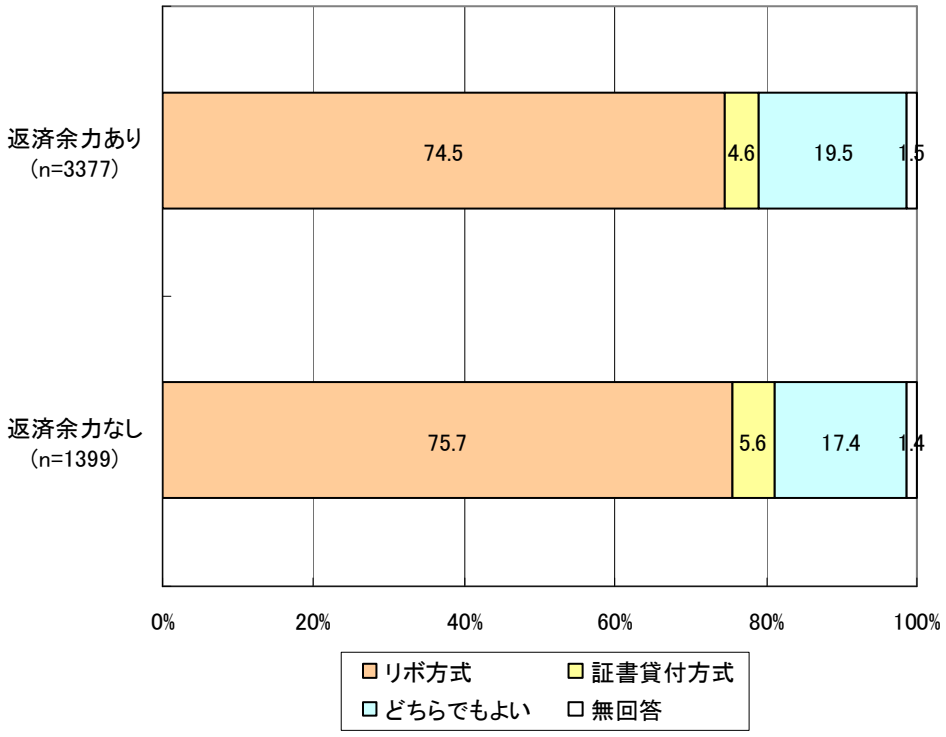
消費者金融の主な利用目的を見ると、返済余力なしグループは、「生活費の補填」に用いる割合が50%に達する。



※「返済余力あり」の値で降順

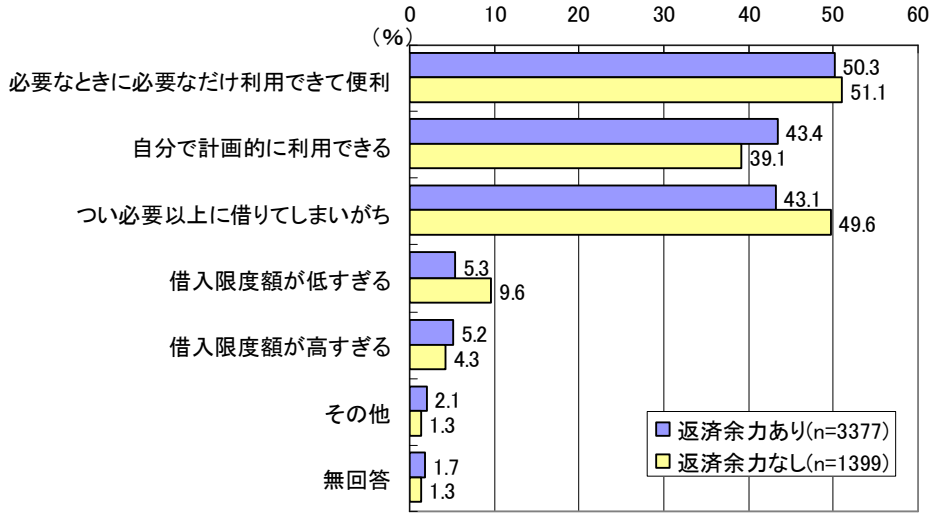
・望ましい貸付方式

　どちらのグループも「リボルビング方式」がよいとする回答が4分の3を占め、際立った差異は見られない。



・リボルビング方式の貸付についての評価

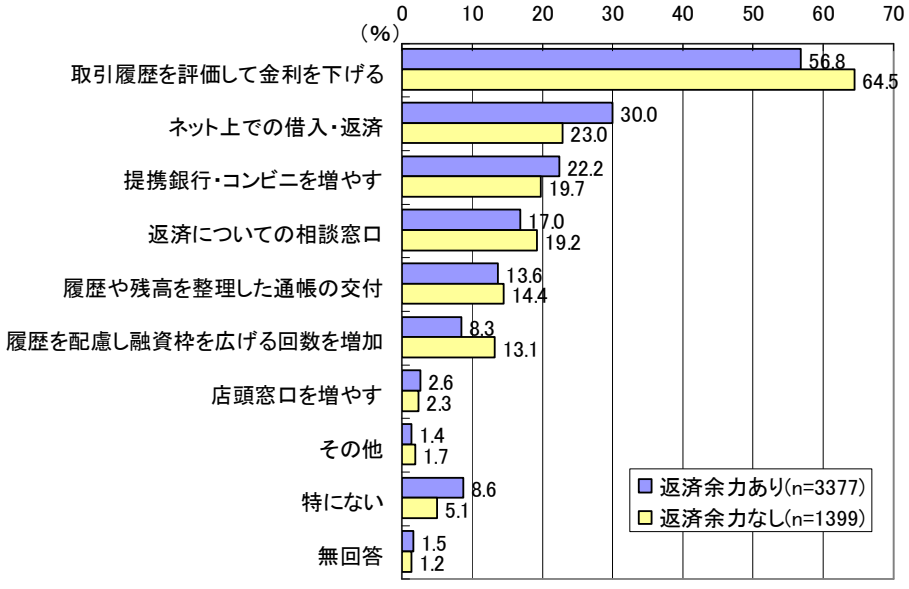
どちらのグループも「必要なときに必要な金額が利用できて便利」がもっとも多い。「計画的に利用できる」は返済余力ありグループで、「つい必要以上に借り入れてしまいがち」は返済余力なしグループで比率が高くなっている。



※「返済余力あり」の値で降順

・消費者金融会社に充実してもらいたいサービス

「ネットでの借入・返済」は返済余力ありグループ、「返済についての相談窓口」、「履歴や残高を整理した通帳の交付」、「履歴を配慮し融資枠を広げる回数を増加」は返済余力なしグループで比率が高くなっている。



※「返済余力あり」の値で降順

7-2.判別分析による特徴の抽出

分析方法

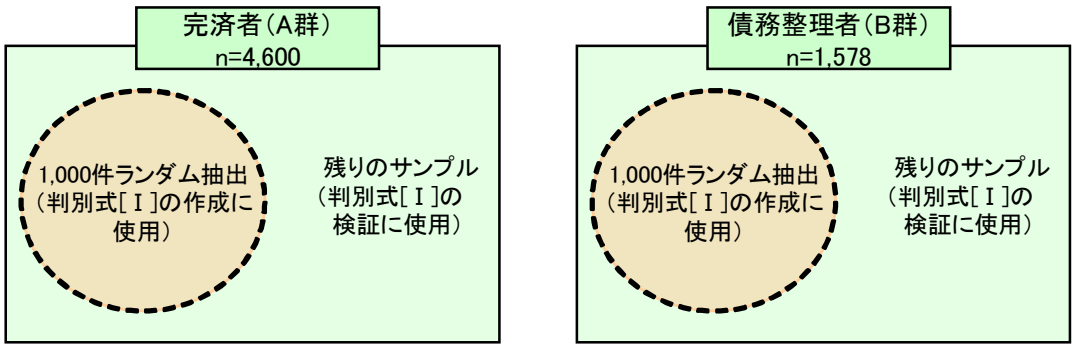
アンケート調査により収集したデータにもとづき、以下のねらいを達成するために、統計解析を実施した。具体的には、線形判別関数分析と呼ばれる判別分析の手法を活用した。

〔Ⅰ〕完済者（A群）と債務整理者（B群）の違いと特徴を抽出する。

〔Ⅱ〕返済余力ありグループ（C群）と返済余力なしグループ（D群）の違いと特徴を抽出する。

また、上記判別分析に対して、以下の検証を行なった。

〔Ⅲ〕完済者（A群）と債務整理者（B群）の違いを判別する〔Ⅰ〕式に、上記判別分析に使用しなかった（A群）（B群）の残りのサンプルを投入することで、判別式の精度を検証する。



〔Ⅳ〕完済者（A群）と債務整理者（B群）の判別式[Ⅰ]を用いて、返済余力ありグループ（C群）と返済余力なしグループ（D群）の将来を予測する。

〔参考〕決定木による分析を行い、〔Ⅰ〕、〔Ⅱ〕の判別結果について検証する。

[Ⅰ]完済者（A群）と債務整理者（B群）に関する解析

① サンプルサイズ

A群のサンプルサイズn_A＝1000　　B群のサンプルサイズn_B＝ 1000

※A群4600人のうち、欠損値のないサンプルをランダムに1000人、B群1578人から1000人それぞれ抽出し、残りは検証に用いた。

② 解析の方法

線形判別関数分析を実施した。実施にあたり、ステップワイズ法により説明変数の選択を行った。変数選択を行った理由は、A群とB群で差の大きな変数を明確にするためである。

③ 判別式

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

思考的向性　計	0.038
対処様式　計	0.037
本人職業　派遣社員	0.187
居住地域　東北	0.190
居住地域　中部	−0.141
居住地域　中国	0.283
配偶者職業　会社員	0.149
配偶者職業　パート･アルバイト	0.348
配偶者職業　専業主婦	0.281
家族　配偶者	−0.417
家族　自分のきょうだい	0.159
家族　祖父母	−0.347
長子成長段階　子どもはいない	−0.122
個人年収	−0.000
住居形態 賃貸	0.195
親族や友人からの借入　ある	0.211
返済負担感　消費者金融の借入	−0.154
返済相談機関ニーズ　たぶん利用しない	−0.133
突発的な資金調達の必要（1～10万未満）	0.123
ローン利用の重視点　金利	−0.117
ローン利用の重視点　会社の信頼度	−0.199
ローン利用の重視点　返済のしやすさ	−0.135
ローン利用の重視点　借入可能かどうか	0.168

過去最多の借入社数（カテゴリ）　1～3社	−0.680
過去最大の借入金額	0.002
主な利用目的　物品購入	−0.163
主な利用目的　引越し代	−0.265
主な利用目的　生活費の補填	0.117
主な利用目的　ギャンブル費	−0.300
主な返済方法　月々決まった額だけ	0.228
主な返済方法　月々と臨時収入の併用	−0.192
消費者金融選択理由　保証人・担保が不要	0.132
充実して欲しいサービス　ネット上での借入・返済	−0.139
充実して欲しいサービス　提携銀行・コンビニを増やす	−0.134
充実して欲しいサービス　取引履歴を評価して金利を下げる	−0.095
返済困難時の対処 相談窓口に相談	0.596
返済困難時の対処 弁護士・司法書士に相談	1.519
返済困難時の対処 銀行カードローンを利用	−0.288
返済困難時の対処 クレジット会社キャッシングを利用	0.220
返済困難時の対処 他金融機関ローンを利用	0.209
返済困難時の対処 親類・知人から借りる	0.238
リボ方式評価　必要なときに必要なだけ利用できて便利	−0.102
返済の状況　予定通り	0.234
返済の状況　予定より遅い	0.795
利用の仕方自己評価　必要以上借りる方が多い	0.343
利用の仕方自己評価　必要以上借りる	0.189
（定数）	−1.079

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

④ 判別規則

判別式を用いて判別得点zを計算する。

⑤ 判別式の精度

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

		判別グループ	予測ｸﾞﾙｰﾌﾟ番号		合計
			完済者	債務整理者	
元のﾃﾞｰﾀ	度数	完済者	930	70	1000
		債務整理者	115	885	1000
	%	完済者	93	7	100
		債務整理者	11.5	88.5	100

※元のｸﾞﾙｰﾌﾟ化されたｹｰｽのうち 90.8% 個が正しく分類されました。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

完済者の93%、債務整理者の89%（全体で91%）が正しく分類されており、
判別式の精度は良好と考えられる。

⑥ 結果の解釈

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

標準化係数

思考的向性　計	0.077
対処様式　計	0.064
本人職業　派遣社員	0.046
居住地域　東北	0.046
居住地域　中部	−0.042
居住地域　中国	0.061
配偶者職業　会社員	0.060
配偶者職業　パート･アルバイト	0.102
配偶者職業　専業主婦	0.091
家族　配偶者	−0.208
家族　自分のきょうだい	0.046
家族　祖父母	−0.059
長子成長段階　子どもはいない	−0.061
個人年収	−0.091
住居形態 賃貸	0.096
親族や友人からの借入　　ある	0.086
返済負担感　消費者金融の借入	−0.120
返済相談機関ニーズ　たぶん利用しない	−0.043
突発的な資金調達の必要（1～10万未満）	0.050
ローン利用の重視点　金利	−0.056
ローン利用の重視点　会社の信頼度	−0.093
ローン利用の重視点　返済のしやすさ	−0.064
ローン利用の重視点　借入可能かどうか	0.075

過去最多の借入社数（カテゴリ）　1～3社	−0.270
過去最大の借入金額	0.256
主な利用目的　物品購入	−0.076
主な利用目的　引越し代	−0.076
主な利用目的　生活費の補填	0.056
主な利用目的　ギャンブル費	−0.098
主な返済方法　月々決まった額だけ	0.103
主な返済方法　月々と臨時収入の併用	−0.085
消費者金融選択理由　保証人･担保が不要	0.065
充実して欲しいサービス　ネット上での借入･返済	−0.061
充実して欲しいサービス　提携銀行･コンビニを増やす	−0.049
充実して欲しいサービス　取引履歴を評価して金利を下げる	−0.047
返済困難時の対処 相談窓口に相談	0.145
返済困難時の対処 弁護士･司法書士に相談	0.544
返済困難時の対処 銀行カードローンを利用	−0.078
返済困難時の対処 クレジット会社キャッシングを利用	0.080
返済困難時の対処 他金融機関ローンを利用	0.060
返済困難時の対処 親類･知人から借りる	0.083
リボ方式評価　必要なときに必要なだけ利用できて便利	−0.050
返済の状況　予定通り	0.107
返済の状況　予定より遅い	0.339
利用の仕方自己評価　必要以上借りる方が多い	0.146
利用の仕方自己評価　必要以上借りる	0.047

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

係数の符号と判別規則、およびクロス集計の結果から、以下のような特徴を抽出した。

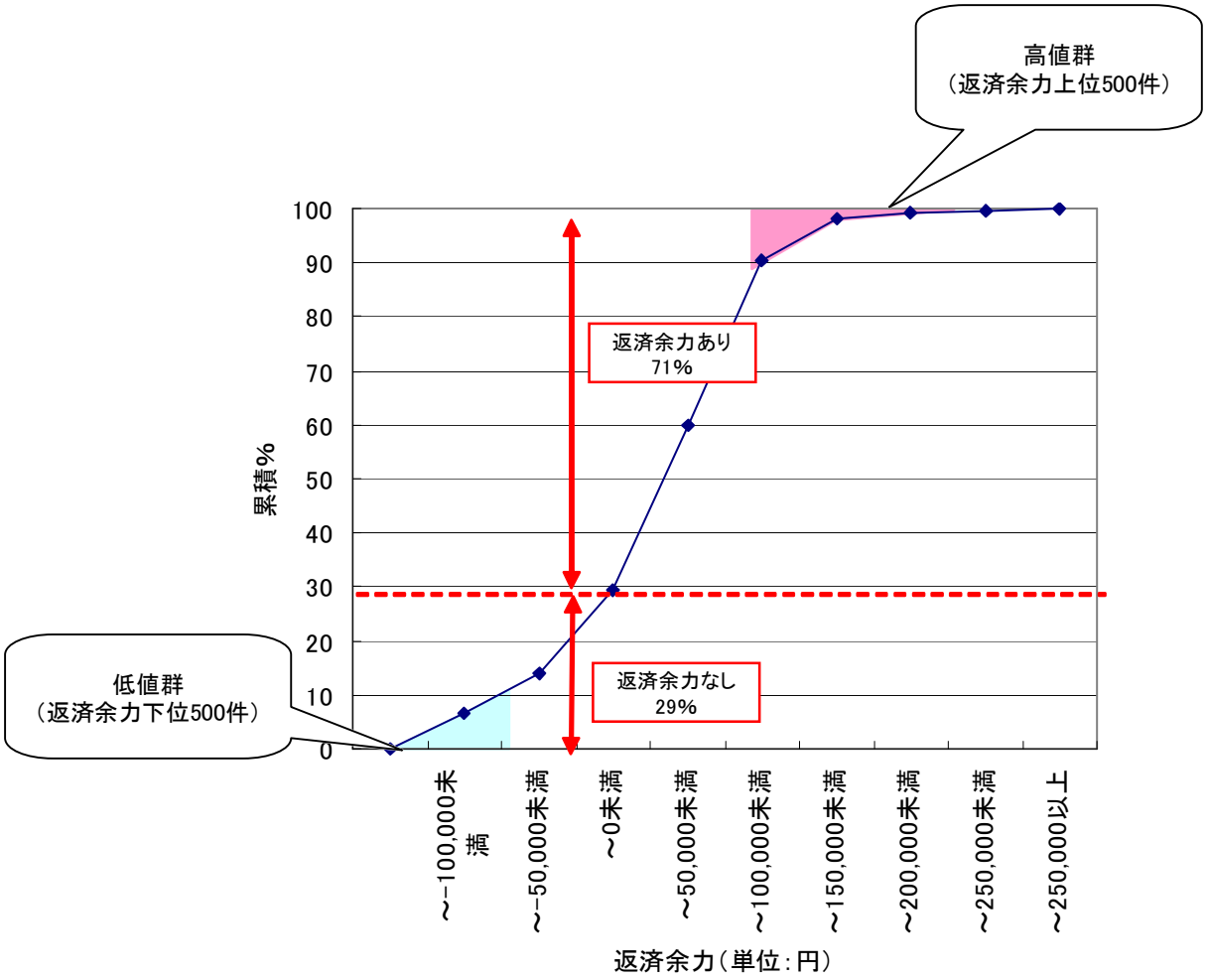
	＜完済＞	＜債務整理＞
心理特性		思考的向性が高い※
職業		派遣社員
居住地域	中部	東北、中国
配偶者職業		パート・アルバイト
同居家族	配偶者	
個人年収	高い	
住居形態		賃貸
親族や友人からの借入		ある
返済負担感（消費者金融の借入）	弱い	
返済相談機関ニーズ	多分利用しない	
突発的な資金調達の必要		1～10万未満
ローン利用時の重視点	金利、会社の信頼度、返済のしやすさ	借入可能かどうか
過去最多の借入社数	1～3社	
過去最大の借入金額		多い
主な利用目的	物品購入	生活費の補填
主な返済方法	月々の返済と臨時収入を併用	月々決まった額だけ
消費者金融を選択した理由		保証人・担保が不要
充実して欲しいサービス	ネット上での借入・返済、提携銀行・コンビニを増やす	
返済困難時の対処		相談窓口に相談、弁護士・司法書士に相談、クレジット会社のキャッシングを利用、他金融機関ローンを利用、親族・知人から借りる
リボルビング方式評価	必要な時に必要なだけ利用できて便利	
返済の状況		予定より遅い
利用の仕方の自己評価		必要以上借りる方が多い、いつも必要以上借りる

※思考的向性：物事を考える際の態度を指し、高点群には「非熟慮的」「無頓着」、
低点群には「熟慮的」「計画的」などの特徴がある。

[Ⅱ]返済余力ありグループ(C群)と返済余力なしグループ(D群)に関する解析

① サンプルサイズ
C群のサンプルサイズn_C＝500　　D群のサンプルサイズn_D＝ 500

※より特徴を明確にするために、返済余力の上位500件(高値群)、下位500件(低値群)を抽出。



※本調査では、先述したとおり返済余力をより厳格な定義に従って求めているため、実際には返済余力のカーブは上図より上方にシフトするものと考えるべきであろう。

② 解析の方法

線形判別関数分析を実施した。実施にあたり、ステップワイズ法により説明変数の選択を行った。変数選択を行った理由は、C群とD群で差の大きな変数を明確にするためである。

③ 判別式

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

年齢　20代	0.199
自己統制力　計	0.049
SS資源　計	0.030
本人職業　経営者･会社役員	−0.394
本人職業　自由業	0.488
本人職業　団体職員	−0.567
本人職業　専業主婦	0.409
本人業種 卸売･小売業	−0.217
本人業種 金融･保険業	0.672
本人業種 運輸業	−0.346
配偶者職業　経営者･会社役員	0.790
配偶者職業　自営業	−0.505
配偶者職業　団体職員	1.384
家族　自分の子ども	0.300
家族　自分の父親	0.331
家族　自分の母親	0.302
家族　配偶者の父親	−1.206
家族　配偶者の母親	1.154
家族　自分のきょうだい	0.706
家族　自分の孫	1.868
個人年収	0.000
預貯金額	0.000
主たる家計管理者　自分自身	−0.353
主たる家計管理者　配偶者	0.329
住居形態 持ち家	−0.228
住居形態 賃貸	−0.624

親族や友人からの借入　ある	−0.340
返済負担感　消費者金融の借入	0.198
返済相談機関ニーズ　是非利用したい	−0.606
ローン利用の重視点　金利	−0.194
ローン利用の重視点　会社の知名度	0.201
ローン利用の重視点　返済のしやすさ	0.231
ローン利用の重視点　借入可能かどうか	−0.346
現在の借入社数(カテゴリ)　1～3社	0.493
過去最大の借入金額	−0.002
最初の利用目的　子どもの教育費	−0.539
最初の利用目的　遊興費･娯楽費	0.358
最初の利用目的　引越し代	0.466
主な利用目的　物品購入	−0.264
主な利用目的　冠婚葬祭費	0.559
主な利用目的　事業資金の補填	−0.356
主な利用目的　生活費の補填	−0.292
主な利用目的　その他の借金返済	−0.366
充実して欲しいサービス　返済についての相談窓口	0.176
充実して欲しいサービス　店頭窓口を増やす	−0.546
返済困難時の対処 クレジット会社キャッシングを利用	−0.392
リボ方式評価　自分で計画的に利用できる	0.237
リボ方式評価　借入限度額が高すぎる	0.397
リボ方式評価　借入限度額が低すぎる	−0.227
返済の状況　予定より遅い	−0.179
(定数)	−0.253

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

④ 判別規則

判別式を用いて判別得点zを計算する。

⑤ 判別式の精度

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

		判別グループ	予測ｸﾞﾙｰﾌﾟ番号		合計
			返済余力あり	返済余力なし	
元のﾃﾞｰﾀ	度数	返済余力あり	449	51	500
		返済余力なし	63	437	500
	%	返済余力あり	89.8	10.2	100
		返済余力なし	12.6	87.4	100

※元のｸﾞﾙｰﾌﾟ化されたｹｰｽのうち 88.6% 個が正しく分類されました。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

返済余力高値群の90%、返済余力低値群の87%（全体で89%）が正しく分類されており、判別式の精度は良好と考えられる。

⑥ 結果の解釈

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

標準化係数

年齢　20代	0.078
自己統制力　計	0.115
SS資源　計	0.096
本人職業　経営者･会社役員	−0.100
本人職業　自由業	0.079
本人職業　団体職員	−0.064
本人職業　専業主婦	0.085
本人業種 卸売･小売業	−0.071
本人業種 金融･保険業	0.127
本人業種 運輸業	−0.075
配偶者職業　経営者･会社役員	0.133
配偶者職業　自営業	−0.101
配偶者職業　団体職員	0.123
家族　自分の子ども	0.147
家族　自分の父親	0.143
家族　自分の母親	0.136
家族　配偶者の父親	−0.160
家族　配偶者の母親	0.190
家族　自分のきょうだい	0.254
家族　自分の孫	0.102
個人年収	0.152
預貯金額	0.100
主たる家計管理者　自分自身	−0.166
主たる家計管理者　配偶者	0.135
住居形態 持ち家	−0.110
住居形態 賃貸	−0.290

親族や友人からの借入　ある	−0.135
返済負担感　消費者金融の借入	0.137
返済相談機関ニーズ　是非利用したい	−0.272
ローン利用の重視点　金利	−0.095
ローン利用の重視点　会社の知名度	0.080
ローン利用の重視点　返済のしやすさ	0.111
ローン利用の重視点　借入可能かどうか	−0.161
現在の借入社数（カテゴリ）　1～3社	0.204
過去最大の借入金額	−0.278
最初の利用目的　子どもの教育費	−0.108
最初の利用目的　遊興費･娯楽費	0.116
最初の利用目的　引越し代	0.116
主な利用目的　物品購入	−0.102
主な利用目的　冠婚葬祭費	0.116
主な利用目的　事業資金の補填	−0.113
主な利用目的　生活費の補填	−0.135
主な利用目的　その他の借金返済	−0.153
充実して欲しいサービス　返済についての相談窓口	0.066
充実して欲しいサービス　店頭窓口を増やす	−0.084
返済困難時の対処 クレジット会社キャッシングを利用	−0.153
リボ方式評価　自分で計画的に利用できる	0.116
リボ方式評価　借入限度額が高すぎる	0.089
リボ方式評価　借入限度額が低すぎる	−0.064
返済の状況　予定より遅い	−0.082

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

係数の符号と判別規則、およびクロス集計の結果から、以下のような特徴を抽出した。

	＜返済余力あり＞	＜返済余力なし＞
年齢	20代	
心理特性	自己統制力が高い、ソーシャルサポート資源が豊富※	
職業	自由業、専業主婦	経営者・会社役員
業種	金融・保険業	卸売・小売業、運輸業
配偶者職業	経営者・会社役員、団体職員	自営業
同居家族	自分の子ども、自分の父親、自分の母親、配偶者の母親、自分の兄弟、自分の孫	配偶者の父親
個人年収	高い	
預貯金額	多い	
主たる家計管理者	配偶者	自分自身
住居形態		賃貸
親族や友人からの借入		ある
返済負担感（消費者金融の借入）	弱い	
返済相談機関ニーズ		是非利用したい
ローン利用の重視点	会社の知名度、返済のしやすさ	借入可能かどうか
現在の借入社数	1～3社	
過去最大の借入金額		多い
最初の利用目的	遊興費・娯楽費、引越し代	子どもの養育費
主な利用目的	冠婚葬祭費	事業資金の補填、生活費の補填、その他の借金返済
返済困難時の対処		クレジット会社キャッシングを利用
リボルビング方式評価	自分で計画的に利用できる、借り入れ限度額が高すぎる	借入限度額が低すぎる
返済の状況		予定より遅い

※自己統制力：自らの行動をコントロールする力の強さを指し、高点群には「忍耐強い」「慎重」、低点群には「衝動的」「快楽欲求的」などの特徴がある

※ソーシャル・サポート資源：その人のもつ周囲の支援ネットワークを指し（本調査では特に情緒的側面に絞っている）、高点群は「豊富」で、低点群は「脆弱」である

[Ⅲ]完済者(A群)と債務整理者(B群)に関する判別式の検証

① サンプルサイズ

A群(残り)のサンプルサイズ$n_{A'}$＝3488　　B群(残り)のサンプルサイズ$n_{B'}$＝ 535

※A群は4600人、B群は1578人おり、判別式の作成に各1000人を使用し、
検証にA群3488人、B群535人を使用した。A群の残り112人、B群の残り43人は
欠損値があるため判別分析から除外した。

② 判別式　[Ⅰ]の結果を参照

③ 判別規則　[Ⅰ]の結果を参照

④ 判別式の精度

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

		判別グループ	予測ｸﾞﾙｰﾌﾟ番号		合計
			完済者	債務整理者	
元のﾃﾞｰﾀ	度数	完済者	3205	283	3488
		債務整理者	66	469	535
	%	完済者	91.9	8.1	100
		債務整理者	12.3	87.7	100

※元のｸﾞﾙｰﾌﾟ化されたｹｰｽのうち 91.3% 個が正しく分類されました。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

完済者の９２％、債務整理者の８８％(全体で９１％)が正しく分類されており、
判別式の精度は良好であると確認された。

[Ⅳ]完済者(A群)と債務整理者(B群)の判別式による、返済余力ありグループ(C群)と返済余力なしグループ(D群)の予測

① サンプルサイズ

C群のサンプルサイズ$n_{C'}$＝3285　　D群のサンプルサイズ$n_{D'}$＝1376

※C群は本来3377人、D群は1399人いるが、C群の残り92人、D群の残り23人は欠損値があるため判別分析から除外した。

② 判別式　[Ⅰ]の結果を参照

③ 判別規則　[Ⅰ]の結果を参照

④ 判別結果

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

		判別グループ	予測ｸﾞﾙｰﾌﾟ番号		合計
			完済者	債務整理者	
元のﾃﾞｰﾀ	度数	返済余力あり	2233	1052	3285
		返済余力なし	550	826	1376
	%	返済余力あり	68.0	32.0	100
		返済余力なし	40.0	60.0	100

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

返済余力ありグループは68%が完済者、返済余力なしグループは60%が債務整理者と予測された。

⑤ 判別結果(C群・D群を高値群・低値群に限定した場合)

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

		判別グループ	予測ｸﾞﾙｰﾌﾟ番号		合計
			完済者	債務整理者	
元のﾃﾞｰﾀ	度数	返済余力あり(高値群)	396	104	500
		返済余力なし(低値群)	184	316	500
	%	返済余力あり(高値群)	79.2	20.8	100
		返済余力なし(低値群)	36.8	63.2	100

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

返済余力高値群・低値群に限定してみると、返済余力高値群は79%が完済者、
返済余力低値群は63%が債務整理者と予測された。
つまり、返済余力高値群の現在利用者は完済者の特徴と類似性が見られる。
一方、返済余力低値群の現在利用者は債務整理者や完済者の特徴と類似性が見られない。

［Ⅴ］判別分析項目一覧

調査項目	分析対象グループ			
	〔1〕 完済者(A群)と 債務整理者(B群)		〔2〕 返済余力あり群(C群)と 返済余力なし群(D群)	
	使用	有効	使用	有効
性別	○		○	
年代	○		○	●
心理特性(5因子)	○	●	○	●
職業	○	●	○	●
業種	○		○	●
居住地域(9カテゴリ)	○	●	○	
未婚・既婚	○		○	
配偶者職業	○	●	○	●
世帯主との関係	○		○	
家計を一にする家族人数				
家計を一にする家族構成	○	●	○	●
子どもの有無				
子どもの成長段階と人数	○	●	○	
個人年収	○	●	○	●
世帯年収				
預貯金額	○		○	●
主たる家計管理者	○		○	●
1ヶ月の小遣い	○		○	
住居形態	○	●	○	●
家賃				
住宅ローンの借入有無				
住宅ローンの残高				
住宅ローンの月々返済額				
目的ローンの借入有無				
目的ローンの残高				
目的ローンの月々返済額				
銀行カードローンの借入有無				
銀行カードローンの残高				
銀行カードローンの月々の返済額				
クレジット会社キャッシングの借入有無				
クレジット会社キャッシングの残高				
クレジット会社キャッシングの月々返済額				
共同出資会社の借入有無				
共同出資会社の残高				
共同出資会社の月々返済額				
消費者金融の借入有無				
消費者金融の残高				
消費者金融の月々返済額				
不動産担保ローンの借入有無				
不動産担保ローンの残高				
不動産担保ローンの月々返済額				
親族や友人からの借入有無	○	●	○	●
親族や友人からの借入の残高				
親族や友人からの借入の月々返済額				
勤め先からの借入有無				
勤め先からの借入の残高				
勤め先からの借入の月々返済額				
その他の金融機関からの借入有無				
その他の金融機関からの借入の残高				
その他の金融機関からの借入の月々返済額				
その他の借入の借入有無				
その他の借入の残高				
その他の借入の月々返済額				
月々の返済可能額				
返済負担感(消費者金融)	○	●	○	●
返済相談機関ニーズ	○	●	○	●
突発的に資金調達が必要になった経験	○	●	○	
カードローンの最重視点	○	●	○	●
現在の借入社数			○	●
過去最多の借入社数	○	●	○	
過去最大の借入金額	○	●	○	●
最初の利用目的			○	●
主な利用目的	○	●	○	●
借入頻度				
借入ができない理由				
主な返済方法	○	●	○	
消費者金融を選んだ理由	○	●	○	
もっと充実してもらいたいサービス	○	●	○	●
返済困難時の対処	○	●	○	●
望ましい貸付方式	○		○	
リボルビング方式に対する評価	○	●	○	●
返済の状況	○	●	○	●
利用の仕方のタイプ自己評価	○	●	○	
上限金利の引き下げについて			○	
自分が借りられなくなったら				
借入から完済までの期間				
借入の終了方法				
消費者金融知識【利息の日割り計算ができること】	○		○	
保険加入について				

※有効＝各群を特徴付ける変数として判別分析の結果に上がってきたもの

[参考①] 完済者（A群）と債務整理者（B群）に関する決定木による分析

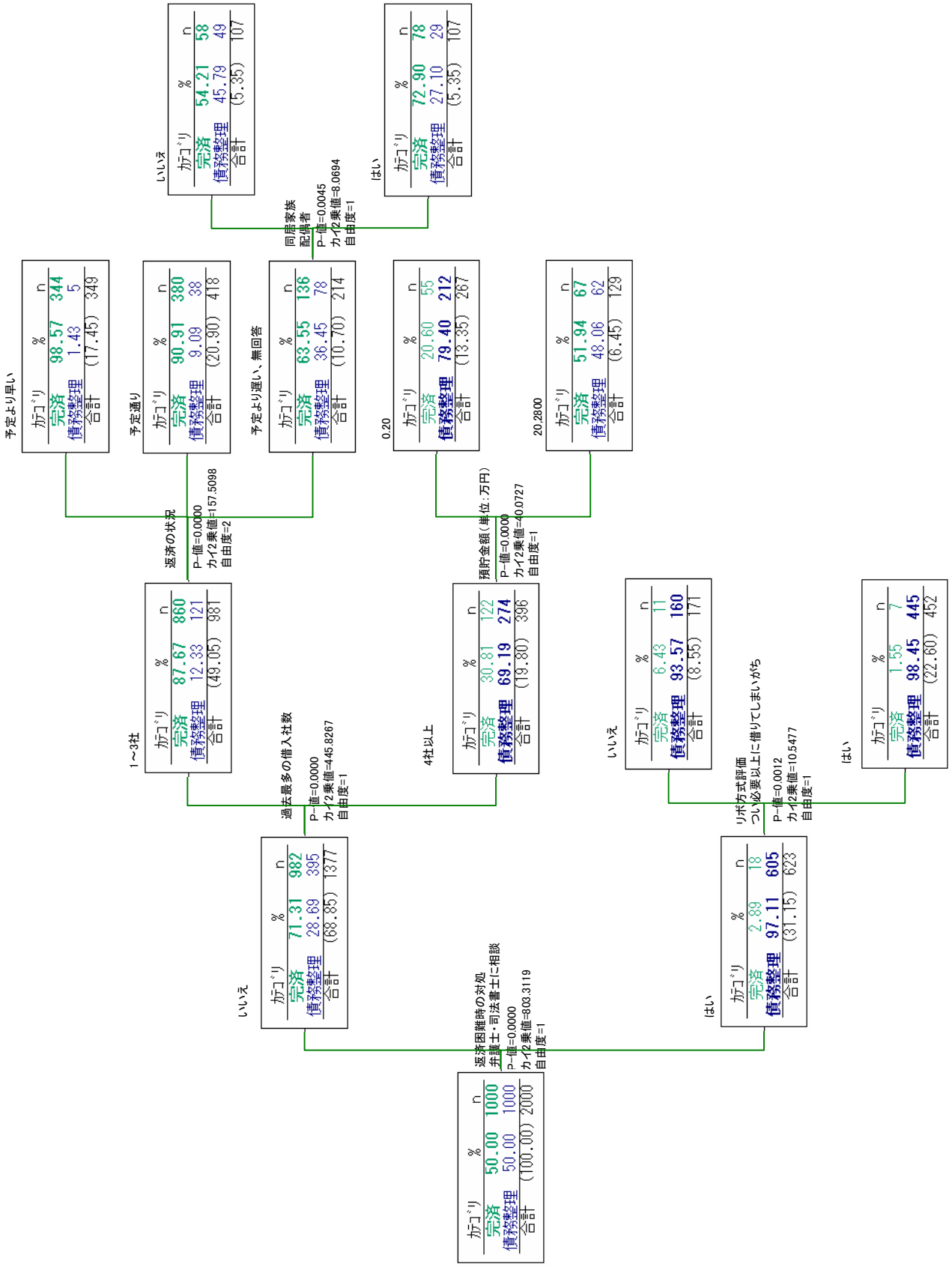
① サンプルサイズ
A群のサンプルサイズn_A＝1000　　B群のサンプルサイズn_B＝ 1000

※[Ⅰ]の判別分析に用いたのと同様のサンプルを使用

② 解析の方法
CHAIDを使用。
樹木の最大深度5、親ノード・子ノードの最少数100、分岐・結合の有意水準各5%に設定し決定木の作成を行なった。

③ 解析の結果
判別分析の結果と矛盾は見られなかった。

④ 分析結果


返済困難時の対処
弁護士・司法書士に相談
P-値=0.0000
カイ2乗値=803.3119
自由度=1
いいえ
はい
過去最多の借入社数
P-値=0.0000
カイ2乗値=445.8267
自由度=1
1~3社
4社以上
返済の状況
P-値=0.0000
カイ2乗値=157.5098
自由度=2
予定より早い
予定通り
予定より遅い、無回答
同居家族
配偶者
P-値=0.0045
カイ2乗値=8.0694
自由度=1
いいえ
はい
預貯金額(単位:万円)
P-値=0.0000
カイ2乗値=40.0727
自由度=1
0.20
20.2800
リボ方式評価
つい必要以上に借りてしまいがち
P-値=0.0012
カイ2乗値=10.5477
自由度=1
いいえ
はい

返済余力ありグループ（C群）と返済余力なしグループ（D群）に関する決定木による分析

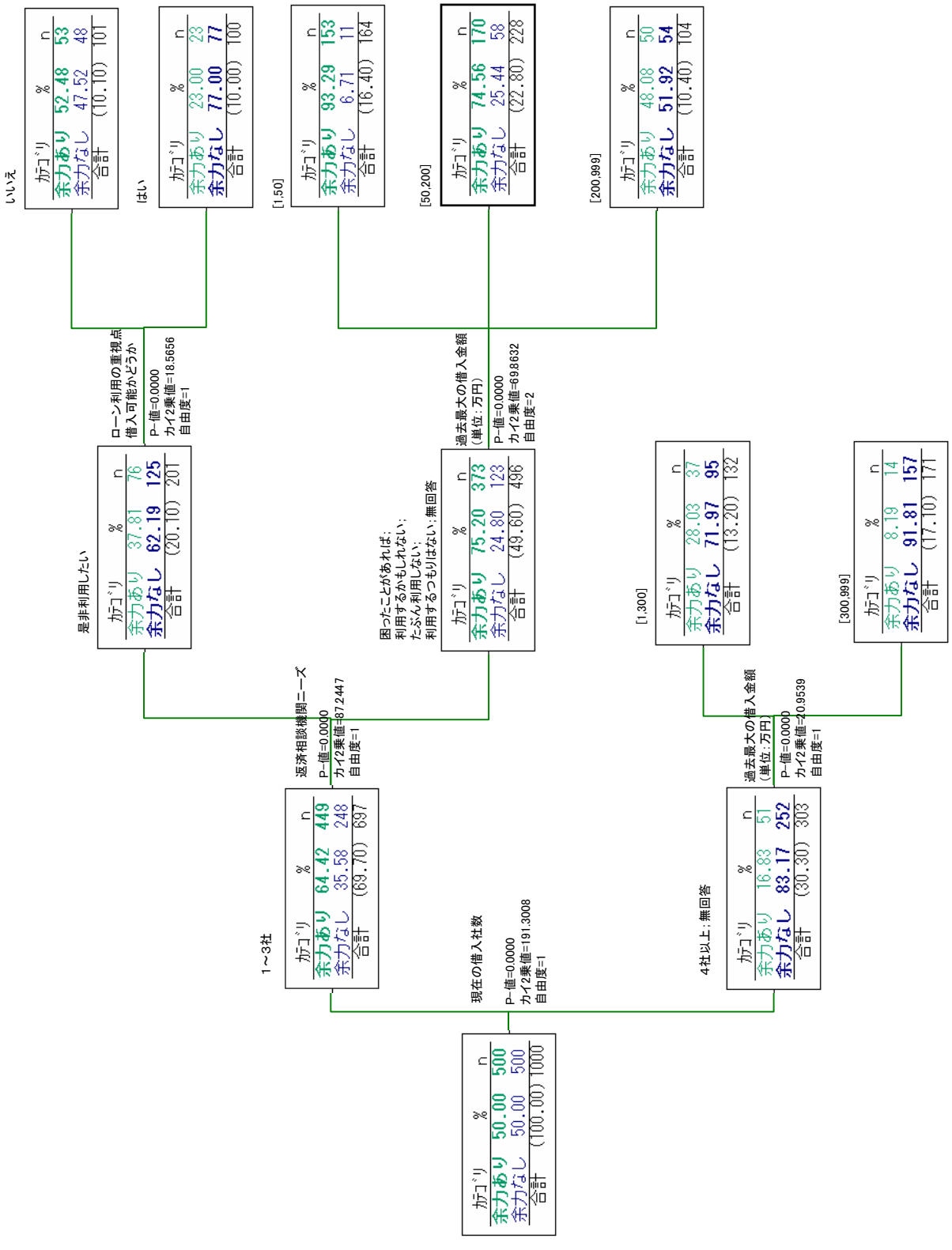
① サンプルサイズ
C群のサンプルサイズn_C＝500　　D群のサンプルサイズn_D＝ 500

※[Ⅱ]の判別分析に用いたのと同様のサンプルを使用

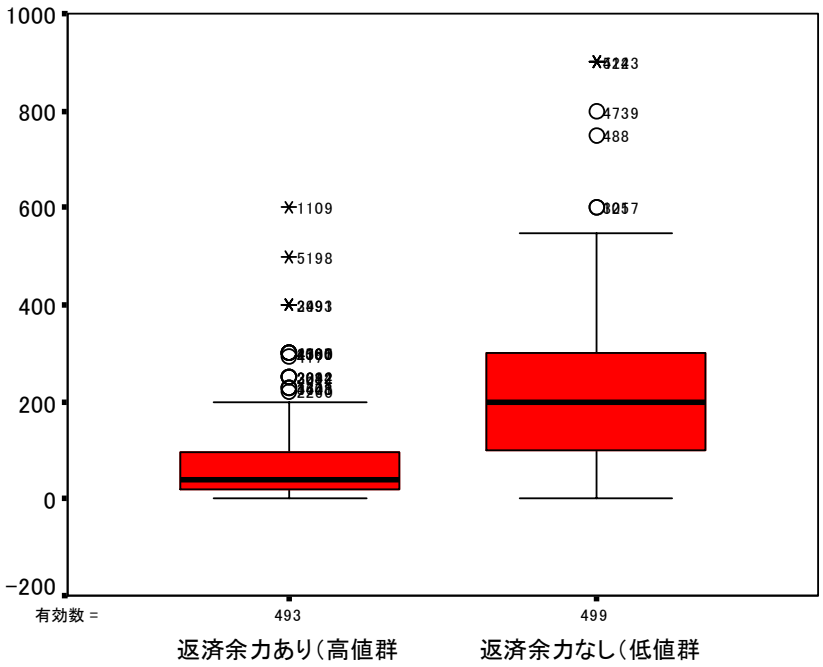
② 解析の方法
CHAIDを使用。
樹木の最大深度5、親ノード・子ノードの最少数100、分岐・結合の有意水準各5%に設定し決定木の作成を行なった。

③ 解析の結果
判別分析の結果と矛盾は見られなかった。

④ 分析結果


カテゴリ % n
余力あり 50.00 500
余力なし 50.00 500
合計 (100.00) 1000
現在の借入社数
P-値=0.0000
カイ2乗値=191.3008
自由度=1
1～3社
カテゴリ % n
余力あり 64.42 449
余力なし 35.58 248
合計 (69.70) 697
返済相談機関ニーズ
P-値=0.0000
カイ2乗値=87.2447
自由度=1
是非利用したい
カテゴリ % n
余力あり 37.81 76
余力なし 62.19 125
合計 (20.10) 201
ローン利用の重視点
借入可能かどうか
P-値=0.0000
カイ2乗値=18.5656
自由度=1
いいえ
カテゴリ % n
余力あり 52.48 53
余力なし 47.52 48
合計 (10.10) 101
はい
カテゴリ % n
余力あり 23.00 23
余力なし 77.00 77
合計 (10.00) 100
困ったことがあれば；
利用するかもしれない；
たぶん利用しない；
利用するつもりはない；無回答
カテゴリ % n
余力あり 75.20 373
余力なし 24.80 123
合計 (49.60) 496
過去最大の借入金額
(単位：万円)
P-値=0.0000
カイ2乗値=69.8632
自由度=2
[1,50]
カテゴリ % n
余力あり 93.29 153
余力なし 6.71 11
合計 (16.40) 164
[50,200]
カテゴリ % n
余力あり 74.56 170
余力なし 25.44 58
合計 (22.80) 228
[200,999]
カテゴリ % n
余力あり 48.08 50
余力なし 51.92 54
合計 (10.40) 104
4社以上；無回答
カテゴリ % n
余力あり 16.83 51
余力なし 83.17 252
合計 (30.30) 303
過去最大の借入金額
(単位：万円)
P-値=0.0000
カイ2乗値=20.9539
自由度=1
[1,300]
カテゴリ % n
余力あり 28.03 37
余力なし 71.97 95
合計 (13.20) 132
[300,999]
カテゴリ % n
余力あり 8.19 14
余力なし 91.81 157
合計 (17.10) 171

[参考②]残高による返済余力高値群と返済余力低値群の判別



箱ひげ図を視察すると、返済余力高値群のほうが返済余力低値群よりも残高の中央値が低いことがわかる。
判別分析の結果は以下の通りである。

分類結果[1]

		判別抽出サンプル	予測ｸﾞﾙｰﾌﾟ番号 返済余力あり(高値群)	予測ｸﾞﾙｰﾌﾟ番号 返済余力なし(低値群)	合計
元のﾃﾞｰﾀ	度数	返済余力あり(高値群)	426	67	493
		返済余力なし(低値群)	177	322	499
	%	返済余力あり(高値群)	86.4	13.6	100.0
		返済余力なし(低値群)	35.5	64.5	100.0

1. 元のｸﾞﾙｰﾌﾟ化されたｹｰｽのうち 75.4% 個が正しく分類されました。

返済余力高値群の正解率は86%と満足のいくものではあるが、返済余力低値群の方は正解率が65%と低く、全体では75%の的中率となる。
残高に基づいて、返済能力を推計することが不可能であるとは否定できないが、利用者属性や心理特性を加味することで返済能力の判定精度は向上するということがいえる。

7-3.心理特性に着目した特徴の抽出

① サンプルサイズ

完済者（A群）：n_A＝4600　債務整理者（B群）：n_B＝1578

現在返済余力ありグループ（C群）：n_C＝3377　現在返済余力なしグループ（D群）：n_D＝1399

② 解析の方法

5つ心理特性を表す因子の得点（各因子12点が満点）について多重比較を行なった

③ 各特性の意味

（1）自己統制力：自らの行動をコントロールする力の強さを指し、高点群には「忍耐強い」「慎重」、低点群には「衝動的」「快楽欲求的」などの特徴がある

（2）思考的向性：物事を考える際の態度を指し、高点群には「非熟慮的」「無頓着」、低点群には「熟慮的」「計画的」などの特徴がある

（3）社会的向性：他者に対する際の態度を指し、高点群には「社交的」「人間好き」、低点群には「非社交的」「人間嫌い」などの特徴がある

（4）対処様式：困難に直面した際の処理の態度を指し、高点群には「積極的」「効果的対処」、低点群には「回避的」「悪循環的対処」などの特徴がある

（5）ソーシャル・サポート資源：その人のもつ周囲の支援ネットワークを指し（本調査では特に情緒的側面に絞っている）、高点群は「豊富」で、低点群は「脆弱」である

④ 解析の結果

解析の結果は次ページ（⑤　解析結果）の通り。各グループの平均で有意な差（95%水準）が見られる場合、表中に「*」を付記した

⑤ 解析結果

LSD

従属変数	(I) 判別グループ	(J) 判別グループ	平均値の差 (I-J)	標準誤差	有意確率	95% 信頼区間	
						下限	上限
Q3 自己統制力　計	完済	債務整理	.17*	.067	.010	.04	.30
		返済余力あり	.01	.052	.915	-.10	.11
		返済余力なし	.44*	.070	.000	.30	.58
	債務整理	完済	-.17*	.067	.010	-.30	-.04
		返済余力あり	-.17*	.070	.017	-.30	-.03
		返済余力なし	.27*	.084	.001	.10	.43
	返済余力あり	完済	-.01	.052	.915	-.11	.10
		債務整理	.17*	.070	.017	.03	.30
		返済余力なし	.43*	.073	.000	.29	.58
	返済余力なし	完済	-.44*	.070	.000	-.58	-.30
		債務整理	-.27*	.084	.001	-.43	-.10
		返済余力あり	-.43*	.073	.000	-.58	-.29
Q3 思考的向性　計	完済	債務整理	-.35*	.060	.000	-.46	-.23
		返済余力あり	-.21*	.046	.000	-.30	-.12
		返済余力なし	-.46*	.063	.000	-.58	-.34
	債務整理	完済	.35*	.060	.000	.23	.46
		返済余力あり	.14*	.063	.026	.02	.26
		返済余力なし	-.11	.075	.128	-.26	.03
	返済余力あり	完済	.21*	.046	.000	.12	.30
		債務整理	-.14*	.063	.026	-.26	-.02
		返済余力なし	-.25*	.065	.000	-.38	-.13
	返済余力なし	完済	.46*	.063	.000	.34	.58
		債務整理	.11	.075	.128	-.03	.26
		返済余力あり	.25*	.065	.000	.13	.38
Q3 社会的向性　計	完済	債務整理	-.01	.085	.879	-.18	.15
		返済余力あり	.01	.066	.841	-.12	.14
		返済余力なし	.04	.089	.678	-.14	.21
	債務整理	完済	.01	.085	.879	-.15	.18
		返済余力あり	.03	.089	.769	-.15	.20
		返済余力なし	.05	.107	.641	-.16	.26
	返済余力あり	完済	-.01	.066	.841	-.14	.12
		債務整理	-.03	.089	.769	-.20	.15
		返済余力なし	.02	.093	.798	-.16	.21
	返済余力なし	完済	-.04	.089	.678	-.21	.14
		債務整理	-.05	.107	.641	-.26	.16
		返済余力あり	-.02	.093	.798	-.21	.16
Q3 対処様式　計	完済	債務整理	.14*	.050	.006	.04	.24
		返済余力あり	.19*	.039	.000	.11	.27
		返済余力なし	.22*	.053	.000	.11	.32
	債務整理	完済	-.14*	.050	.006	-.24	-.04
		返済余力あり	.05	.053	.327	-.05	.15
		返済余力なし	.08	.063	.222	-.05	.20
	返済余力あり	完済	-.19*	.039	.000	-.27	-.11
		債務整理	-.05	.053	.327	-.15	.05
		返済余力なし	.03	.055	.638	-.08	.13
	返済余力なし	完済	-.22*	.053	.000	-.32	-.11
		債務整理	-.08	.063	.222	-.20	.05
		返済余力あり	-.03	.055	.638	-.13	.08
Q3 SS資源　計	完済	債務整理	.29*	.094	.002	.11	.48
		返済余力あり	.20*	.073	.007	.05	.34
		返済余力なし	.69*	.098	.000	.50	.89
	債務整理	完済	-.29*	.094	.002	-.48	-.11
		返済余力あり	-.10	.098	.325	-.29	.10
		返済余力なし	.40*	.118	.001	.17	.63
	返済余力あり	完済	-.20*	.073	.007	-.34	-.05
		債務整理	.10	.098	.325	-.10	.29
		返済余力なし	.50*	.102	.000	.30	.70
	返済余力なし	完済	-.69*	.098	.000	-.89	-.50
		債務整理	-.40*	.118	.001	-.63	-.17
		返済余力あり	-.50*	.102	.000	-.70	-.30

*. 平均の差は .05 で有意

⑥ 特徴の抽出

（1）他の3群と比較した『完済者』の特徴

・自らの欲求に折り合いをつけ、忍耐強く、慎重に行動する

・物事をじっくり考え、計画的に進めていく

・困難に直面した際には、逃げることなく合理的な対処を行なう

・周囲に支えてくれるネットワークをもっている

（2）『返済余力あり群』と『返済余力なし群』の特徴の比較

・『返済余力あり群』は、自らの行動をコントロールすることができる

・『返済余力あり群』は、物事をじっくり計画的に進めていくことができる

・『返済余力あり群』は、支援ネットワークが豊かである

（3）『債務整理者』の特徴

・『完済者』との特徴の差異は依然として変化していない

・『返済余力あり群』と比較すると、自らの欲求に折り合いをつけ、物事をじっくり計画的に進めていく能力が劣っている

・『返済余力なし群』と比較すると、自己統制力が高まり、支援ネットワークは豊かになっているが、依然として無計画で、回避的である

⑦ 要約

・ここで今回の分析で用いた5つの心理因子を使って、自らの行動を律する姿勢を表す「セルフ･コントロール能力」、対人関係に関わる態度を示す「ソーシャル･スキル能力」という、2つの合成変数を定義する。これら2軸による各グループの分布に関しては、次ページの「心理特性に関する2変数による各グループの散布図」を参照

・その結果、『完済者』はセルフ・コントロール能力とソーシャル・スキル能力のいずれも圧倒的に高い能力を有し、これらにより債務と上手に付き合っていくことができたと推察できる

・『返済余力あり群』は『返済余力なし群』よりもセルフ・コントロール能力、ソーシャル・スキル能力のいずれも高い能力を維持しており、これらが債務を上手に利用することに貢献していると推察できる（ただし、『返済余力あり群』には債務歴の短い、すなわち現在のところたまたま返済余力が高いというサンプルも含まれているために、『完済者』との比較ほど強い差異は認められない）

・『債務整理者群』は『返済余力なし群』よりもソーシャル・スキル能力は高い能力を示しているが、これは債務整理を通じて、周囲に告白したり、援助を受けるなどのプロセスを経て、育成されたものと推測できる

・一方、『債務整理者群』はセルフ・コントロール能力における自己統制力・思考的向性・対処様式ついては、依然として『完済者』に比べ低く、自己統制力・思考的向性については『返済余力あり群』に比べ低いままで、これが再発の根拠になると推察できる

⑧ 結論

・セルフ・コントロール能力、ソーシャル・スキル能力の未開発者は、債務額や返済額の多少にかかわらず、『返済余力なし群』、『債務整理者群』に陥る可能性が高い

・与信時に心理・行動特性を配慮する必要がある

・『返済余力あり群』の中にまぎれている返済余力なし予備群を早期発見する必要がある

・『返済余力なし群』には、セルフ・コントロール能力とソーシャル・スキル能力の両側面の育成を意図したカウンセリングを行なう必要がある

・『債務整理者群』には、セルフ・コントロール能力の育成を意図したカウンセリングを行なう必要がある

【心理特性に着目した分析結果のまとめ】

先述の通り、今回の分析で用いた5つの心理因子を使って、自らの行動を律する姿勢を表す「セルフ･コントロール能力」、対人関係に関わる態度を示す「ソーシャル･スキル能力」という、2つの合成変数を定義した。

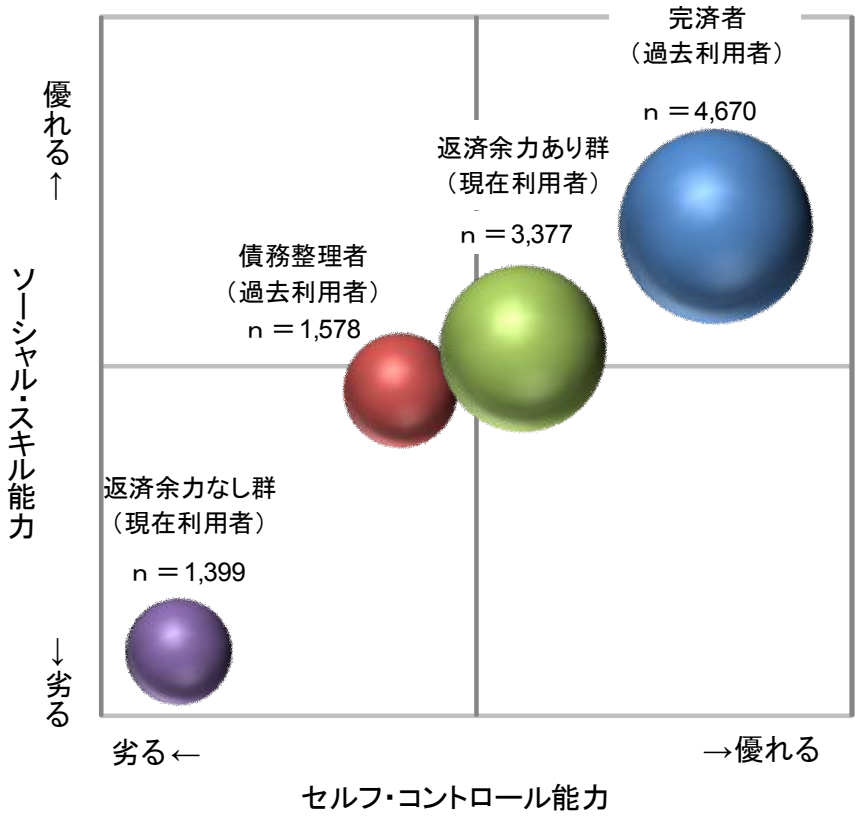
「セルフコントロール力」＝（「自己統制力」+「思考的向性」+「対処様式」）/3

「ソーシャルスキル力」＝（「社会的向性」+「ソーシャルサポート資源」）/2

これら2変数の座標軸上に、『完済者』、『債務整理者』、『返済余力あり群』、『返済余力なし群』をそれぞれの平均得点に基づき位置づける（散布図として図示する）。その結果が下図である。

下図より、『完済者』のセルフ･コントロール能力とソーシャル･スキル能力は、両変数とも圧倒的に高い位置にあることが分かる。次に、両変数で上位に位置づけられるグループが『返済余力あり群』であり、これに『債務整理者』が続く。両変数で最も低い位置にあるグループが『返済余力なし群』となる。

心理特性に関する2変数による各グループの散布図



図中の円は各グループのサンプル数の大きさを示す

8. 消費者金融の利用者像 （まとめ）

以上の分析結果および並行して行なったインタビューの結果を踏まえ、消費者金融利用者各グループの特徴を抽出すると、以下のようなプロフィールを推測することができる。なお、下記の利用者像に該当する特定の人物がいる訳ではない。

完済者像

性別	男性
年齢	30代
地域	愛知県在住
職業	安定した企業の会社員
家族構成	配偶者（妻は専業主婦）
利用目的	物品購入で借入
利用態度	情報リテラシーが高く、日常的にインターネットを利用している
	リボルビング機能を上手く利用できる
	返済にボーナスを利用した
心理特性	我慢強い
	困難には正面から立ち向かう
	人的ネットワークが充実している

債務整理者像

性別	男性
年齢	40代
地域	東北在住
職業	会社のリストラにより現在派遣社員
家族構成	妻はパート
住居	賃貸住まい
利用態度	現在、金融機関から借入できないので、時々親戚から借り入れている
	月々決まった額のみを返済していた
心理特性	社会性や人的なネットワークが債務整理を経て広がった
	欲求を抑えられず、我慢しようとする意識が低い
	熟慮せずおっちょこちょいな側面がある

返済余力あり利用者像

性別	女性
年齢	20代
職業	自身は専業主婦
家族構成	子どもあり、親と同居（3世帯家族）
住居	持ち家（親との同居により住宅ローン負担小）
利用目的	消費者金融利用の目的はお小遣いの補てん（友人との付き合い）、冠婚葬祭費
利用態度	家計管理者は夫
	借金は必要以上に借り入れず、計画的に利用している
心理特性	何でも相談できる家族・友人がいる
	自分の欲求に折り合いを付けながら行動できる

返済余力なし利用者像

性別	男性
年齢	50代
職業	自営業
住居	賃貸に居住
利用目的	当初の借入は子どもの教育費のために利用した
	突発的な事業資金が必要になると借入れている
利用態度	時々返済が遅れて、他の消費者金融会社やクレジットから借り入れて返済している
	親戚からも時々借り入れる
心理特性	時々無計画な行動をとってしまう
	自分の支えになってくれる人がいない
	返済について相談できる窓口を求めている